

# 博士学位一覽

---

学位記番号	人博第472号	氏名	中 <sup>なか</sup> 西 <sup>にし</sup> 之 <sup>ゆき</sup> 信 <sup>のぶ</sup>
学位授与の日付	平成21年7月23日		
専攻・指導教官名	人間・環境学専攻 新宮一成		
論文題目	失語症者における「言葉の世界」へ戻る仕事 ——「話せない」/「話せる」とは如何なることか		
調査委員	〔主査〕新宮一成 〔副査〕岡田敬司, 山梨正明		

---

### 論文要旨

急性期に消失しない限り完治のない失語症を被り、病前のように「言語を使えなくなった」時、人間（失語症者）はどのように行動するのか、本論では、フロイト・ラカンの精神分析の視点から、失語症者の「無意識」の動きに注目して、検討し考察した。

失語症治療の一般的な指針とされている「言語機能がどれほど改善されるか」、「実用的なコミュニケーション能力がどれほど向上するか」といった側面は、確かに“日常生活・社会生活上での「話せる」/「話せない」”には大いに関係する。しかし、実際の臨床では、「失語症が改善すれば話せる」、「重度の失語症だから話せない」などと単純には言えない、つまり、「失語症が改善しても話せない」、「重度の失語でも話せる」と言ってよい場合もある。「言語機能」や「実用的コミュニケーション能力」という次元は、失語症のまま“言葉の世界”との関係をどのように取り戻すのか”には、本質的には関与しないと考えられる。ここで本論は、失語症者の「無意識」に着目した。

失語症という、意識的な努力では解決困難な事態ゆえに、無意識的言語活動が失語症者において活性化する。この無意識的活動を通して「言葉の世界」との関係を取り戻そうとするのである。即ち、かつて経験した“第二の誕生”の時の記憶、失われた起源である「話せない」存在としての自分にまで、無意識のうちに回帰し、そこから、「話す」主体となるまでの過程を再び辿ろうとする（「言葉の世界」へ戻る仕事）。この仕事にはいくつかの道があることが見出された。「話せないまま話す」（神経症的危機を越える選択）、「話せているのに話せない」（神経症的选择）、「話せないまま愛されたい」（倒錯的选择）という三つの選択肢である。これら選択肢の違いは、失われた起源＝「話せない」ことと主体との無意識的関係の構造的相違によって生じる。そして、失語症者が「言葉の世界」においてどのように「話せる」/「話せない」ようになるかはこれらの選択肢によって決定される。

「言語を使う」とはそもそもどのようなことだろうか。精神分析理論によれば、それは言語の作用（原抑圧）によって、構造的に、事後的に成立した「自明性という錯覚」にすぎない。それゆえ、「健常者」は皆と同じように、「自明な日常性」として「言語を使う」ことに専心して生きようとする。しかし一旦「失語症者」となれば、その行動（三つの選択肢）から分かるように、「言語を使う」ことは、「錯覚」ゆえに、組み替えたり、あるいは捨て去ろうとさえする。「言語を使う」ことは再構造化し得るのである。失語症者の言語活動はそのことを示している。さらに翻って考えれば、「健常者」も「人生上の困難」に出会う時、失語症者と同じように、「言語を使う」ことを更新しようとする。「言語を使う」ことを再構造化するというのは、何も失語症者だけではなく、「話す」主体＝人間として生きてゆく以上、誰もが遭遇する課題なのである。

---

学位記番号	人博第473号	氏名	はまだ すみだ きょう こ 浜田(角田)京子
学位授与の日付	平成21年7月23日		
専攻・指導教官名	人間・環境学専攻 新宮一成		
論文題目	統合失調症の両価性から観た主体の倫理的価値をめぐる構造論的問題		
調査委員	〔主査〕新宮一成 〔副査〕大東祥孝, 津田謹輔		

---

### 論文要旨

本学位論文では、統合失調症の両価性という現象をとおして主体成立と言語体系との関係を分析し、主体の倫理的価値をめぐる一般的問題と疾病特異的問題とを論じた。

第1章では、統合失調症患者が言語体系のなかで生活するうえでの基本的な困難について考察し、仮説を呈示してドイツと日本において検証した。患者の本質的な障害は記号の実践的選択にあり、その局面においては両価性という現象が重要であると考えられた。また記号の実践的選択は現象学における世界内投企を記号論的地平に投影した事象として解釈できることを呈示したが、この解釈は第5章においても採用した。

第2章では思春期統合失調症の2症例、第3章では統合失調症の5症例を呈示し、その両価性の言語構造と力動を抽出して分析するとともに、精神病理学における両価性の概念を再考した。これらの研究で抽出した統合失調症の両価性の言語構造は、主体と世界とのラッセル型パラドックス構造のもとで主体の価値を問う葛藤を表現しており、特異的な所見である善悪の反転はこの構造のなかで生起していると考えられた。

第4章では、まず主体と世界との基本的な関係として両価性という現象を考え、様々な構想を展望しつつ、あらためて第2章と第3章の研究で見出した両価的な実存的葛藤への圧力と、両価的価値をめぐる善悪の反転を検討した。さらに第5章では、第1章から第4章までの一連の研究を通じて見出された重要なテーマである、善悪の反転と主体と世界とのラッセル型パラドックス構造の関連について探究した。善悪の反転は、世界内投企ないし記号選択の局面において主体と世界とのラッセル型パラドックス構造の内部において起こることが確認され、臨床的には致命的で特異的な現象であるにもかかわらず、論理的には意味を持たない現象であるという結論に達した。この現象を説明するためには、志向性に内在する両価性や、両価的な欲動といった概念をメタレヴェルから導入し、否定的価値の優位を想定する必要があることが示唆された。

こうして本学位論文の一連の研究では、一般的な主体および統合失調症性の主体が言語体系に参入する際に生起するパラドキシカルな構造的問題が明確となり、さらなる課題が呈示されることになった。両価性は精神の分裂から統合にいたるプロセス全体に関わっているが、そのなかでも統合失調症の特異点はパラドックス構造のなかにある。この特異点での統合失調症における決定的な障壁を説明するためには、倫理的で両価的な価値がメタレヴェルに想定され、しかもその価値は非対称であることが要請された。

---

学位記番号	人博第474号	氏名	陸越
学位授与の日付	平成21年9月24日		
専攻・指導教官名	文化・地域環境学専攻 阿辻哲次		
論文題目	女部漢字初探		
調査委員	〔主査〕阿辻哲次 〔副査〕赤松紀彦, 道坂昭廣		

---

### 論文要旨

女部漢字とは許慎が『説文解字』において創建した部首法に従い、「女」字を整理分類する依拠として、一つの部に収められた文字集団である。言語記号としての文字は、その形成や発展の過程において、大量の歴史文化情報を含むことが知られている。女部漢字研究は文字学研究の重要命題であるだけでなく、中国伝統文化研究の主要な内容でもあると認識できよう。

本論文では、女部漢字を研究対象として、字源を遡及したり、流変を探究したりするとともに、関連する研究成果にならって、多角度から、女部漢字を総体的且つテーマごとに研究を行った。まず、文献学的方法で中国文字学研究の流れを体系的に整理し、各歴史段階における女部漢字の研究状況や代表的な研究成果を総括した。次いで、女部漢字の構造特徴やデータ統計に関するテーマ研究を行い、その構造特徴に変化をもたらした様々な要因を分析する一方、漢字構造の区分原則に従い、その類型を更に細分した。それと同時に、構造の上から異なる女部漢字をデータ統計した結果、左右式構造が絶対的多数を占め、次は上下式構造で、他の構造式が補助とされていることが分る。また、この結果を踏まえて、左右式構造の女部漢字から見る尊卑観や慣性的思惟、及び女部漢字構造の変化における伝統思惟方式の影響を分析し、中国人の伝統思惟方式と女部漢字の構造形式の形成との内在的関連性を究明した。さらに、個別の女部漢字を解釈し、その字義を挙証しながら、婚俗文化や姓氏文化との関係を解明し、古代中国の社会状況や女性の社会地位、生活光景を窺い知ることができた。最後に、具体的な字例を通じて、女部漢字に隠されている中国古代器物文化的情報を新しい研究視野から分析し、文字に包蔵される本義を究明し、新たな女部漢字研究の領域を広げようと試みた。

---

学位記番号	人博第475号	氏名	上野勝之
学位授与の日付	平成21年9月24日		
専攻・指導教官名	文化・地域環境学専攻	西山良平	
論文題目	平安貴族社会の宗教的心性とその変容——夢観念と疾病認識——		
調査委員	〔主査〕西山良平 〔副査〕元木泰雄、島崎 健		

---

### 論文要旨

本論では、平安時代を中心とした貴族社会の宗教的心性及び霊魂観の展開過程を、平安期の夢観念と平安・鎌倉前期の邪気・瘡病概念の考察を通して明らかにした。

一章では平安貴族社会の夢を考察し、浄土教的霊魂観の発露である死者の夢及び予兆としての悪夢の新たな登場を指摘し、神仏の夢及び現実に影響を与えるものという夢観念と併せて、夢が貴族達の日常的な信仰意識、宗教的心性を反映していることを論じた。

二章では専ら怨霊とされてきた邪気性格と調伏加持について再検討した。邪気は主に人格的変調を指標とする病であり、かつ怨霊以外の様々な霊が見られるが、院政期以後にはより軽度の症状も邪気の範疇に含む、霊を長期間ヨリマシに留めるやり方、鎌倉初期には生霊が現れるなど様々な変化があることを指摘した。さらにヨリマシ加持は密教の阿尾捨法に由来、一〇世紀後半に一般化したことを論じ、これらの邪気概念や加持作法が中世以後の霊魂観や憑祈禱の原形となることを説いた。

三章では摂関期の藤原道長の邪気について考察、初期には邪気を恐れ、後一条朝には自ら調伏する強気に転じ、晩年には仏に依存する姿勢になるなど、政治的立場と連動し変化することを明らかにした。従来の道長像や貴族たちが邪気=怨霊を恐れたというイメージを覆し、古代貴族の宗教的観念が政治的立場と連動する点を指摘した。

四章は瘡病認識の変遷を検証する。瘡は瘡鬼が起こす病として摂関期には加持を中心にまじないや修法が用いられ、院政期には加持を中心とするがさらに多様化する。鎌倉後期には医師による治療が大幅に増え、室町期には医師が扱う範囲の病となるがまじないを多用する点に特殊性を残す、と時代による疾病認識と治病法の変遷の存在を明確に論じた。

おわりにでは室町貴族の夢と邪気を考察し、悪夢や瘡鬼概念が衰退、密教僧の加持が後退する一方、平安期に形成された神仏や死者の夢、邪気概念が変容しつつ継続していることを明らかにし、結論として平安貴族社会の宗教形態がその後の日本宗教史上における一つの原形となることを示した。

---

学位記番号	人博第476号	氏名	宮西香穂里
学位授与の日付	平成21年9月24日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 田中雅一		
論文題目	沖縄における米軍兵士と日本人女性との結婚と家族生活 —— 軍隊の文化人類学に向けて ——		
調査委員	〔主査〕田中雅一 〔副査〕菅原和孝, 速水洋子 (東南アジア研究所教授)		
専門委員	河野 仁 (防衛大学校教授), 上杉妙子 (成蹊大学非常勤講師)		

---

### 論文要旨

本論文の目的は、在沖米海兵隊基地での文化人類学的な研究に基づき、米軍兵士と日本人女性との結婚と家族生活における葛藤や対立について、男女双方の視点から考察することである。軍隊の文化人類学的研究においては、軍人の家族や結婚については十分な研究が行なわれてきたとは言えない。本論文はそのような研究の現状を是正することになる。

本論文は、三部構成からなる。第一部（第1章から第3章まで）では、米軍と沖縄との接触の場を記述する。米軍基地内の生活は、階級に従って秩序づけられており、基地の外とは異なる生活空間がある。海兵隊基地キャンプ・シュワブと本島北部名護市の辺野古の住民との間に見られる交流を事例に、地域レベルでの出会いに注目する。

第二部（第4章から第6章）では、男女の語りをもとに米軍兵士と日本人女性との出会いから結婚までを描く。米軍兵士との交際には、沖縄への赴任期間、異動、派兵による不在などが重要な影響をおよぼす。結婚生活では、血縁・地縁を基盤にした沖縄の女性と家族との強い絆が、結婚生活の障害になる。また、性生活の問題に悩む米軍兵士の姿も浮き彫りとなる。

第三部（第7章から第10章）では、米軍兵士と日本人女性との結婚を沖縄という地域社会の文脈に位置づけ、米軍と沖縄社会地との間で揺れ動く夫婦の姿を描く。米軍関係者である夫やその妻たちは、沖縄の基地反対運動や基地問題について複雑な思いを抱いている。米軍兵士の生活の基本である異動をめぐる、夫婦はさまざまな葛藤に直面する。除隊して沖縄での生活を決意した元海兵隊員が直面する問題や、離婚後も子供のために沖縄で生活する元海兵隊員の姿を描く。日本人妻たちはさまざまなネットワークを形成している。最後に創価学会インターナショナル(SGI)の事例から軍隊や沖縄を超えたネットワークの役割を明らかにする。

以上から、軍隊と沖縄の地域社会との間でさまざまな葛藤や衝突を抱えながら生活している夫婦の姿を明らかにする。

---

学位記番号	人博第477号	氏名	西 矢 貴 文
学位授与の日付	平成21年9月24日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 西山良平		
論文題目	葦津耕次郎 —— 「国家神道」期における一神道人の軌跡 ——		
調査委員	〔主査〕西山良平 〔副査〕松田 清, 元木泰雄, 阪本是丸 (國學院大学神道化学部教授)		

---

### 論文要旨

本論文は、いわゆる「国家神道」期に波乱の生涯を送った神道人である葦津耕次郎（明治11 [1878]～昭和15 [1940]）の思想と行動を明らかにしようとするものである。

日本近代における神社神道は、他の宗教とは異なる位置づけが行われて固有の役割が期待されていたことは広く知られている。しかし、これまでの「国家神道」研究では、その形成過程に関するものや、個別研究として明治維新期の国学者や神道系新宗教の教祖を扱ったものは数多く存在するものの、「国家神道」期において神社界との関わりなかであって種々の活動を展開した人々に関する研究が行なわれることは稀であった。

葦津は、宮崎宮に奉仕する社家に生を享け、生育環境において祖先の事績から多大な影響を受けながら、「回心」を経て強烈な神道 —— とりわけ宮崎宮 —— への信仰心を抱くようになった。さらに、大正期に川面凡児という宗教家と出会うことで、その神道思想を体系化させていくこととなる。そして、在野であって、大正期から昭和初期に神社界に一定の影響力を持ちながら、実業家として、あるいは国家主義的活動家として精力的に多彩な活動を展開する非常に特異な神道人となるのである。

そのような葦津の全体像に迫るために、「回心」・「寤寐憂国」・「八幡様のために」・「敵国降伏」・「祭政一致」をキーワードとして、明治期における思想形成過程・大正期における憂国の士としての諸実践・事業家としての活動・対外観・国体観などを検討する。

「国家神道」は、近代日本思想の中核ともいえる天皇をめぐるイデオロギーと密接に関わるものであるが、従来の天皇制イデオロギー論や「国家神道」論の枠組みを逸脱する側面が多い葦津の軌跡をたどることは、「国家神道」の内実のみならず、近代日本思想の深奥に接近する手掛かりを得る一助となるものである。

---

学位記番号	人博第 478 号	氏名	小田 涼 <sup>りょう</sup>
学位授与の日付	平成 21 年 11 月 24 日		
専攻・指導教官名	人間・環境学専攻 東郷雄二		
論文題目	フランス語定名詞句の意味論 —— 指示対象の唯一性をめぐって ——		
調査委員	〔主査〕東郷雄二 〔副査〕山梨正明, 大木 充, 井元秀剛 (大阪大学大学院言語文化研究科准教授)		

---

### 論文要旨

本論文は、フランス語の単数定冠詞 *le / la* (英語の *the*) を伴う名詞句 (以下、単数定名詞句) の機能・使用条件の解明を試みたものである。単数定名詞句の生起条件を説明する最も有力な説は、「指示対象が唯一に同定されるときに単数定名詞句が使用される」という唯一性説である。しかし先行研究では、明示的な先行詞が発話状況にも先行文脈にもなく、指示対象が唯一に同定できない (ように見える) 単数定名詞句の例が存在することが指摘されている。本論文では、これまで唯一性説の反例とされてきた定名詞句の用法を含む四つの単数定名詞句の用法がすべて唯一性説によって説明できることを示した。

本論文が拠り所とする単数定名詞句の唯一性条件とは、「聞き手が、唯一の関与的な指示対象が曖昧性なく区別できるような局所的な解釈領域を再構築することができるとき単数定名詞句が使用できる」というものである。ただし、定名詞句そのものに解釈領域を限定または特定する機能はない。定名詞句解釈の足場となる局所的な解釈領域の性質は、定名詞句の用法ごとに少しずつ異なっている。本論文の第 2 章で分析した明示的な先行詞のない定名詞句の用法では、何らかの認知フレームが局所的な解釈領域となっている。第 3 章で扱った *le N<sub>1</sub> de [+/-DEF] N<sub>2</sub> (=the N<sub>1</sub> of [+/-DEF] N<sub>2</sub>)* 型の属格を伴う定名詞句では、属格名詞 *N<sub>2</sub>* (および認知フレーム) が主要部名詞 *N<sub>1</sub>* の解釈領域を限定している。第 4 章で分析したいわゆる直示的用法の定名詞句では、認知フレームと発話状況が重ね合わされた意味解釈フレームや、発話の現場における出来事性と発話者の知覚領域によって構築される意味解釈フレームが、唯一の指示対象の存在前提が成り立つ局所的な解釈領域となる。第 5 章で論じた照応的用法の定名詞句では、指示対象および指示対象の周辺の要素が織りなす関係の網の目から成る意味解釈フレームが定名詞句使用の支えとなっている。

これまでの定名詞句の研究では、現実世界における指示対象の同定に気をとられて、局所的な解釈領域を考慮することの重要性が等閑視されてきた。本論文では、単数定名詞句の本質は、何らかの限定された局所的な談話領域との関係において唯一に決まる指示対象の存在前提を伝達することであることを明らかにし、解釈の支えとなる局所的な談話領域なくして定名詞句が成立しないということは、定名詞句は指示対象を直接に指示するのではなく、解釈領域を介して間接的に指示対象と結びついているということを示唆した。



---

学位記番号	人博第479号	氏名	はたけ やま うた こ 畠山歌子
学位授与の日付	平成22年1月25日		
専攻・指導教官名	文化・地域環境学専攻 松田 清		
論文題目	18世紀ロシア貴族の教育文化 —— 国家勤務者のための教育とその変容 ——		
調査委員	〔主査〕松田 清 〔副査〕小山 静子, 服部 文昭		
専門委員	木村 崇 (京都大学名誉教授)		

---

### 論文要旨

近年のロシア貴族史研究では、教育文化と政治、家族、女性、文化交流などとの関連性を問う作業が相次いで出されている。それらは、長期にわたるエカテリーナ二世の時代、とくに1770、80年代に教育文化史上の画期が存在することを示唆している。このような先行研究の成果をふまえて、本研究では、貴族身分の形成や社会構成上の特徴、教育政策、教育体験について考察することで、この1770、80年代の画期を再検討した。

18世紀の貴族身分は大きな階層差を特徴とした。貴族身分の内部では、土地、所有する農民の人数、官等や官職、宮廷や有力者との関係、一族の由緒のみならず、貴族らしい生活様式や教育などのあらゆる基準にもとづいて、序列が形成されていた。この序列を固定化する諸政策として、教育の領域でも、特権的教育機関が創設され、1736年布告にもとづく査閲制度や「貴族解放令」により、家庭や外国で子弟を教育する特権が貴族上層に付与された。「貴族解放令」は、貴族が将来、新たな領域で活動するための教育を可能にした。

本研究では7つの事例を通して、18世紀から19世紀初頭における貴族の教育体験を分析した。これにより、18世紀の中葉から後半にかけて、首都の名門貴族を中心に、教育内容が教養中心となり、国家勤務というよりは自己の修養を目的とする性格を帯びようになったこと、女子教育の始動を背景に、子どもの教育に積極的に携わる母親が登場したことを確認した。ロシア貴族のヨーロッパ修学旅行についても、国益に寄与する国家勤務者、愛国者としてふさわしい教養を習得するという従来の目的が、自分自身の学業や教養の獲得、ヨーロッパでの生活体験や余暇へと変容した状況を明らかにした。

ロシア貴族の教育は、国家勤務に備え国益に寄与する人材を育成することが目指された。それと同時に、教育は、身分が国家勤務によって規定され、その上で特権を与えられていた貴族が、ロシアの社会や文化に対して帯びていた自らの真の使命について自問し、新しい貴族像を模索する機会を提供するものでもあった。1770年代以降、貴族出身者を中心に、社会の啓蒙を意図した出版活動や文学活動が本格化する。また、18世紀末～19世紀初頭には、ヨーロッパ文学の翻訳やサロンで活躍する女性が登場する。そのようなロシア貴族の社会・文化活動は、本研究でみたような、国家勤務によって大きく規定されていた貴族の思考、行動、生活様式の変化と密接な関係にあったのである。

---

学位記番号	人博第480号	氏名	田中 <sup>たなか</sup> (山本 <sup>やまもと</sup> )佳世子 <sup>かよこ</sup>
学位授与の日付	平成22年1月25日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 ベッカー, カール		
論文題目	学校でいかに生と死を語るか ——「いのちの大切さ」を教えることをめぐって——		
調査委員	〔主査〕ベッカー, カール 〔副査〕吉田 純, 杉万俊夫, 得丸定子(上越教育大学教授)		

---

### 論文要旨

本論文は、「なぜ「生と死の教育」がなかなか普及しないのか」という問いに対し、それらがどのように問題にされ、語られてきたのかを論じることで、その問いに答えていこうとするものである。

第Ⅰ部では「生と死の教育」及び行政による「心の教育」の推進者の言説、それらに関する新聞報道における言説を分析した。道徳教育は近年「心の教育」として心への傾斜が見られるようになっている。他方、死を教える「死への準備教育」は、「生」と「感じること」へと傾斜し、「心の教育」に取り込まれているようにも見える。しかし、実際にはいじめや少年犯罪が増えているわけではなく、青少年や学校の荒廃を謳うモラル・パニックに、「生と死の教育」を推進する専門家・市民運動や、行政による「道徳教育」推進の動きが加わり、そうした活動がマスコミによって更に取り上げられ、一般社会に「心の教育や生と死の教育が必要だ」とする意識が形作られていった。

第Ⅱ部では、教員の語りを収集・分析した。教員の多くは、提唱・推進されている「心の教育」「生と死の教育」には批判的であったが、提唱者とは異なる形で生と死を語っていた。すなわち、①授業の中での人生について問いかけたり、②事件や事故のあった際など、一番しみこむタイミングでの生と死に関して話をしたり、③教員と生徒の対面で熱く人生を語りあったりしていることが、明らかになった。

「なぜ「生と死の教育」がなかなか普及しないのか」。「生と死の教育」を必要だとする推進者や世論に反し、教員はそれを必要としていないのである。しかし、自然発生的な形で、生と死については語っている。そこで、今後「生と死の教育」の提唱者や研究者は、①道徳教育へと傾斜するのではなく、生徒のニーズに応じていく「生と死の教育」を志向することで、②教員がおのずから語っていくような動機付けを支援し、③教員の語りの引き出しになるような知識を提供していくことが求められる。

---

学位記番号	人博第481号	氏名	藤本透子
学位授与の日付	平成22年3月23日		
専攻・指導教官名	環境相関研究専攻 山田孝子		
論文題目	カザフスタンにおける儀礼の再活性化の人類学的研究		
調査委員	〔主査〕山田孝子 〔副査〕菅原和孝, 松浦 茂, 宇山智彦		

---

### 論文要旨

本論文は、中央アジアのカザフスタンを対象に、ポスト・ソビエト時代において宗教的な儀礼を再活性化することが、地域社会に生きる人々にとってもつ意味について考察したものである。カザフスタンでは、ソ連崩壊にともなう独立の前後から宗教復興と民族文化や歴史の見直しが顕著であり、そのなかで儀礼や祝祭の再活性化という現象も生じている。これまでの研究では、そこに「伝統」の連続性をみるか、社会主義の影響を強調するか、あるいは新たな動きととらえるのか議論されてきた。

こうした議論をふまえて本論では、ソ連成立以前からの地域社会の儀礼実践の展開のなかでポスト・ソビエト時代における再活性化を検討し、以下のことを指摘した。カザフ人村落においてソ連成立以前からの連続性が強く意識される一方、ソビエト時代に発展した多民族都市に移住した人々のあいだでは断絶と連続の両面が見られる。ポスト・ソビエト時代に、両者ともに生と死をめぐる儀礼をさかんに行うようになっているが、その意味づけはそれぞれの歴史的経験を反映して異なる面をもつ。

再活性化した儀礼のなかで、カザフ人村落でも多民族都市でも、多くのカザフ人に重要視されるのが、死者へのクルアーン朗唱である。イスラーム復興に際して、カザフ人たちは死者の靈魂の観念にこだわって儀礼を再活性化させ、それが彼らの宗教実践の核となっている。さらに、ポスト・ソビエト時代における社会再編の過程で、大規模な死者供養かつ祝祭であるアスが新たなかたちで復興し、歴史性を核としながら地域のつながりを生み出している。アスは、都市に移住した人々をも巻き込んで、父系クラン、地域、民族のアイデンティティが重層的に表現される場ともなっている。

現代における儀礼の再活性化は、カザフ人たちにとって、ときに葛藤しつつソ連成立以前からの歴史を振り返り、自分の立ち位置を定めていく意味をもつ。彼らの共通性をもちつつも多方向をむいた動きが重なり合う場が、ポスト・ソビエト時代のカザフスタンという社会空間であり、個々人の実践がカザフ人たちにとっての「伝統」のあり方を今後も動かし、形成していくと考えられる。

---

学位記番号	人博第482号	氏名	牧 瀬 英 幹
学位授与の日付	平成22年3月23日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 新宮一成		
論文題目	描画における「生」と「死」の問い——創造性と病理に関する精神分析的研究——		
調査委員	〔主査〕新宮一成 〔副査〕杉万俊夫, 道簀泰三		

---

### 論文要旨

人間にとっての2つの謎である「生」と「死」に対する問いは、近代以降、宗教的、哲学的な文脈を越え、病理という場でも問われるものになった。近代医学の確立以降、人間の「描く」という創造性の中に2つの問いを問う場を求める研究や治療法が発展してきたが、そこにはまだ多くの課題が残されている。

本研究では、そのような課題を現代の様々な病理との連関から捉え直すべく、描画を介して「生」と「死」の問いを問うことの意義を、人間の無意識との関係から考察した。考察を進める際、特に、人間の無意識と深い関わりを持つ「子どもはどこから来るのか」の問いに着目し、また「人間と言語」という根本的な関係から「描くこと」の意味を問い直した。

第1章では、子どもが、「子どもはどこから来るのか」の問いを介して出自の問題を問い、言語的主体として自らを再構成していく中で、描画行為が担った役割を示唆した。第2章では、描画を介して「子どもはどこから来るのか」を問う試みが、主体の属す社会全体を再構成していく上でも欠かせないものであることを、「鯰絵」の分析をもとに示唆した。第3、4章では、月岡芳年と佐伯祐三の作品と病理の関係性を分析し、主体が描画制作を通して、〈他者〉との結節点を生み出し、そこから自らの「死」を省み、「生」を立ち上げていく経緯を明らかにした。第5章では、臨床実践の中で、主体が描画を介して〈他者〉の欲望から自らの欲望を生成していく過程を考察し、その治療的意義を指摘した。第6章、終章では、「死」が人間の無意識において「もう一度人間化すること」としてあること、また「死」に臨む者が自らの「死」の問いを描画や夢に表現することの意義を示唆した。最終的に、本研究で得られた結果をもとに、描画を介して「生」と「死」の問いを問い続けることの重要性を示唆した。

---

学位記番号	人博第 483 号	氏名	マリア ルシア コレア Maria Lucia Correa
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 新宮 一成		
論文題目	Mishima Yukio or A Literature of the Act —— A Psychoanalytic Reading —— (三島由紀夫或いは行為の文学 —— ひとつの精神分析的読解 ——)		
調査委員	〔主査〕新宮 一成 〔副査〕須田千里, 水野尚之		

---

### 論文要旨

本論文は、近代日本の作家である三島由紀夫が行為の問題に如何に取り組んだかについて、彼の諸作品中におけるその多面的出現に焦点を当てながら、精神分析的視点によってそれを再構築しようとする試みである。衝撃的な自殺という最後の行為によってとりわけよく知られる三島には、作家活動の開始から行為の問題への関心が見られるが、三島の作品の中心テーマとして最初に行為が現われるのは、『金閣寺』においてである。この小説の書かれた時期には、それ以降生涯続けられることとなるボディビルの実践も開始されている。第一章においては、この『金閣寺』についての読解を行い、金閣寺の放火という犯罪的行為を導いた諸原因について、とりわけ精神分析理論における父の機能の失敗という観点から検討を行う。第二章においては、主に三島の晩年のエッセイ『太陽と鉄』の読解を通じて、言葉と行為のあいだの二項対立が検討される。さらに、行為が実行される唯一の手段として、三島作品中で身体概念が持っている重要性についてジャック・ラカンの現実界の概念とのかかわりから取り上げる。また、特に晩年の自殺を考える上で、この身体と行為の合一のうちにある演劇的な要素を見逃してはならないだろう。この点については、第三章で、精神分析における世界、劇、および劇中劇についての考えを参考にしながら三島のいくつかの演劇を検討することで、接近する。最後に、三島自身が役者として実際に舞台上に上ったという事実について考察を行うことから、彼自身のパフォーマンスな自殺について理解することを試みる。こうした考察を通じて、行為の概念の見地から、この事件についての新たな解釈を得ることができるだろう。

---

学位記番号	人博第484号	氏名	やまぐち しょう 山口 尚
学位授与の日付	平成22年3月23日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 安部 浩		
論文題目	物理主義とクオリア ジャクソンの知識論証に対する ひとつの応答		
調査委員	〔主査〕安部 浩 〔副査〕富田恭彦, 佐藤義之, 戸田剛文		

---

### 論文要旨

本稿は、フランク・ジャクソンの知識論証の考察を通じ、クオリアをめぐる諸問題の物理主義的な解決を提案する。本稿はふたつの部から構成される。第1部は知識論証をめぐる論争の歴史をサーヴェイする。第2部は、あるタイプの物理主義——これは「タイプA物理主義」と呼ばれる——に基づき、知識論証に対するひとつの批判を展開する。各節の内容の詳細は以下のとおりである。

第1節は知識論証の内実とその核心となる発想を説明する。知識論証とは、科学的な知識をいくら積み重ねてもクオリアの知識は得られないという直感に基づいて、世界が自然科学によって完全に説明されると主張する物理主義を反駁する論証である。第2節は、知識論証をめぐる論争の歴史を三つの時期に分け、それぞれの期間を代表する哲学者たちの議論を紹介する。そして、知識論証を論ずるスタンスとして、二元論、新事実戦略、タイプB物理主義、タイプA物理主義などを定式化する。

第3節から第5節は「批判的な」作業にとり組む。第3節は二元論が知識論証を通じては正当化されえないことを主張し、第4節は新事実戦略が魅力的な選択肢でないと主張する。そして第5節はタイプB物理主義が「内的な困難の餌食になっている」と主張する。

第6節から第8節は「構築的な」作業にとり組む。第6節はデネットによる知識論証の分析が妥当であると主張する。第7節はルイス＝ネミロウの能力分析を擁護する。第8節は、近年のジャクソンの表象主義に依拠して、「クオリア」概念の説明を試みる。

第9節は、結語として、本稿の立場——タイプA物理主義——の「見かけの」受け入れ難さが致命的な問題点でないことを指摘する。たとえタイプA物理主義がそれ自体で受け入れ難く感じられるとしても、自然科学やその他の知見から十分な証拠を獲得しうるのであれば、ひとは確信をもって物理主義者たりうるができるだろう。

---

学位記番号	人博第 485 号	氏名	鶴谷奈津子
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 大東 祥孝		
論文題目	自己身体部位失認に関する神経心理学的研究		
調査委員	〔主査〕大東 祥孝 〔副査〕齋木 潤, 船橋新太郎		

---

### 論文要旨

神経心理学の分野では、ヒトの身体認知の基盤として「身体図式」という概念が構築され、身体に関連する様々な障害の説明に用いられてきた。中でも自己身体部位失認は代表的な「身体図式」障害とされてきたが、その一方で身体に特化した病態と言えないのではないかという議論が根強く存在する。とりわけ日本国内では検討例が少なく、研究が進んでいない。またその発症基盤についても研究者間で主張が異なり、統一した見解がないのが現状である。「身体図式」を複数の情報処理過程の総体と考え、身体関連障害をモデル内の機能障害としてとらえなおすことにより病態の共通理解が容易となるのではないだろうか。この考えに基づき、本論文では自己身体部位失認を身体情報処理過程の障害としてとらえるか検討し、「身体図式」の機能モデルに関する考察を試みた。

第一に、両側頭頂葉萎縮例を対象とし身体部位に特異的な障害がみられるかを検証した。身体・顔・動物・物品を対象とし、それぞれのパーツについて呼称および定位課題を行った結果、本症例は身体部位に対する定位が選択的に障害されていることがわかり、自己身体部位失認における身体特異性が確認できた。さらに、身体としての構成は同じであっても、他者の身体部位に対しては呼称・定位が可能であった。このことから、自己と他者の身体の情報処理の差異が示され、その違いが自己身体部位失認の機序と深い関わりを持つことを示唆した。

第二に、同症例の身体情報処理について呈示モダリティを操作した身体部位の呼称・定位課題を行った。視覚呈示では問題のなかった呼称の正答率が触覚呈示では低下したことから、触覚情報に基づく位置の同定が困難であると考えられた。さらに定位はいずれのモダリティを介しても障害が認められ、身体外空間を定位するエラーが高頻度で観察された。これらの結果は、自己中心座標系を利用してターゲットとなる部位の位置をオンラインで処理する過程の問題を示唆する。

以上の症例検討に基づく結果と過去の研究を総合し、「身体図式」を構成する処理過程とその障害について考察した。

---

学位記番号	人博第 486 号	氏名	廣瀬智士
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 松村道一		
論文題目	脳内運動制御機構を利用した視覚情報処理		
調査委員	〔主査〕松村道一〔副査〕船橋新太郎, 小田伸午, 内藤栄一 (ATR 脳情報研究所主任研究員)		

---

### 論文要旨

我々が普段何気なく行っている運動は、そのほとんどが視覚情報に強く依存している。例えば目の前のコーヒーカップを持つとした場合、目で見えたコーヒーカップの位置や大きさから、どのように腕を動かすか、どのように手を開閉するかを決定しなければならない。視覚情報から運動を生成する過程には、大脳皮質頭頂連合野と運動前野の脳内機構が深く関わるということが知られている。近年、この脳内機構は視覚情報から運動を生成する以外にも、様々な場面で視覚情報処理に貢献していることが知られてきている。筆者は運動生成のための脳内機構を利用した視覚情報処理の新たな機能を明らかにした。

ひとつ目の実験では、視覚情報から物体が握めるか握めないかを実際に運動を行わずに判断する過程に、背側運動前野前部領域が重要な役割を果たしていることを、機能的磁気共鳴装置 (fMRI) を用いて明らかにした。この領域は視覚情報から適切な運動の方向や大きさを決定する処理に関わると考えられている。本研究により背側運動前野前部領域の運動生成のための機能が、運動実行を伴わない場合にも視覚情報を処理し、運動可能性判断に貢献していることが示唆された。

ふたつ目の実験では、他者が力を発揮している場面の視覚情報が、自己運動の力を決定している脳内機構で処理されることを行動学的手法を用いて明らかにした。これまで他者運動の視覚情報中の方向や関節の角度 (キネマティクス情報) が運動生成のための脳内機構で処理されていることが知られていたが、本研究により他者運動の視覚情報中の力の情報 (ダイナミクス情報) も運動制御機構を用いて処理されることが示された。

これらの研究により筆者は、運動制御機構による視覚情報処理の新たな二つの機能を明らかにした。このような運動制御と視覚情報処理の両方に関わる脳内機構の働きにより、我々は外界を瞬時に自己の運動と結びつけて知覚し、適応的な行動を選択できると考えられる。



---

学位記番号	人博第 487 号	氏名	藤 <sup>ふじ</sup> 林 <sup>ばやし</sup> 真 <sup>ま</sup> 美 <sup>み</sup>
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 森谷 敏夫		
論文題目	The Effects of Autonomic Nervous System Activity on Mental Illnesses (自律神経活動が精神障害に及ぼす影響)		
調査委員	〔主査〕森谷敏夫 〔副査〕津田謹輔, 林 達也		

---

### 論文要旨

本学位申請論文は、以下の 2 編の国際誌と 1 編の国内誌に掲載された単編論文をもとに構成されている。精神障害者における自律神経活動を研究対象とした I. および III. の論文内容を中心に、精神障害者で高率に合併する肥満に着目して行った II. の内容を加えて記述したものである。

#### I. Autonomic nervous system activity and psychiatric severity in schizophrenia

統合失調症患者の自律神経活動を定量し、精神症状重症度との関連について検討した。被験者の精神症状重症度として、アメリカ精神医学会における評価尺度：Global Assessment of Functioning Scale により High 群と Low 群に区分し解析した結果、精神症状がより重症である Low 群に自律神経活動の有意な低下を認めた。

#### II. Thermoregulatory sympathetic nervous system activity and diet-induced waist-circumference reduction in obese Japanese women

精神障害における重要課題である肥満について基礎研究を行った。栄養バランスの充足した代替食を健常肥満女性に摂取させ、生理作用について検討した。8 週間の代替食摂取後、熱産生を反映する自律神経活動：VLF 成分の変化量が、体組成及び血清脂質プロファイルの変化量と強く相関していることを見出した。

#### III. Autonomic Nervous System Activity and Aging in patients with Schizophrenia

健常者における自律神経活動は加齢により減衰することが既報されているが、統合失調症患者では、年代に関わらず顕著な低下を認めた。さらに、自律神経活動と向精神病薬投与量との間に負の相関関係が認められ、向精神病薬は自律神経活動に強く影響している可能性を示唆した。

---

学位記番号	人博第 488 号	氏名	木原 恵美子
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 山梨 正明		
論文題目	構文現象への認知言語学的アプローチ —— 同族目的語構文を中心に ——		
調査委員	〔主査〕山梨 正明 〔副査〕東郷 雄二, 河崎 靖		

---

### 論文要旨

文法の解明と記述は理論言語学の最重要課題の一つである。文法は構文として現象する。本論文は英語の構文現象を分析することで、より広く、より多様に構文が記述できるのはどのようなアプローチなのかを示す実証研究である。本研究は基本的に認知文法が構築した理論的基盤に立って事例分析を行う。しかし、認知文法のアプローチでも体系的に記述できない現象があることを指摘し、最終的には認知文法理論の一部を修正して、新たな構文観を提示する。

本論文の構成は次の通りである。第 2 章では認知文法理論を概観する。第 3 章では認知言語学に属する三つの理論、認知文法、根源的構文文法、構文文法の問題点を確認し、本研究のアプローチを示す。局所的に観察される構文を記述できる枠組みは全般的に観察される構文も一貫して捉えることができるかどうかを検証するために、本研究は英語の同族目的語構文という使用頻度と生産性が低い構文現象に注目する。第 4 章、第 5 章、第 6 章は同族目的語構文の事例研究である。第 4 章では同構文の多義構造には、動詞、形容詞、名詞の意味、意味合成、構文スキーマを分析する必要があることを示す。第 5 章では同構文の構文スキーマと他の構文スキーマとの関連性を分析する。第 6 章ではレキシコンが同構文の成立と使用に与える影響を示し、同構文はシンボル構造からなる連続体であることを示す。第 7 章では本研究の総括を行う。本研究から明らかになった事象の理論的意義を確認する。

本研究により次の四点が明らかになった。第一に構文の記述には語の意味、意味合成、構文スキーマの分析が必要不可欠である。第二に構文スキーマは拡張するため、形式と意味が類似する構文は関連し合う。第三に個々の構文はレキシコンから文法までの連続体で形成されている。この連続体は通共時的にも連続している。第四に本研究のアプローチは局所のおよび中心的な現象も記述できるアプローチであるため、構文を記述し文法を解明するためには本研究のアプローチが必要不可欠である。

---

学位記番号	人博第489号	氏名	薦 <sup>こも</sup> 田 <sup>だ</sup> 奈 <sup>な</sup> 美 <sup>み</sup>
学位授与の日付	平成22年3月23日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 河崎 靖		
論文題目	意味変化現象の解明 —— 認知言語学的観点から見た意味変化 ——		
調査委員	〔主査〕河崎 靖 〔副査〕齋藤治之, 山梨正明		

---

### 論文要旨

本論文は、意味変化の過程に注目し、従来の記述において見過ごされてきた、意味変化の新たな一面に光を当てることで、これまでとは異なった観点から意味変化の現象を記述することを目的とする。まず、個々の話し手と聞き手が言語を使用する場面において語の意味は理解されるものであるという背景から、通時的言語現象としての意味変化を、実際の言語使用の場における意味の発生の段階及び、そこで現れた意味が一般的に受け入れられる意味の定着の段階とに区別して捉える。そして、意味変化の第一段階において、人間の根本的な認知活動に支えられた、意味の発生の基本モデルを構築する。意味の発生に際しては、概念領域や焦点の働きなど、人間の根本的な認知活動が働くことによって、語に新たな意味が発生するのであり、意味変化現象の根底に、いわば通言語的メカニズムが働いているという考えから、この基本モデルを呈示するものである。

主として個人レベルにおける意味の発生が、意味変化とどのように関わるかという観点から説明を行うことが本論の主旨であるが、意味変化現象を2つの段階に区別できる現象として定義し、第二段階の説明についても詳細に考察を行う。意味の定着については、特に2つの先行研究をもとにして、意味の発生段階における考察を踏まえて、見解を述べる。総じて、意味変化の個別の具体例について説明することを目的とするのではなく、認知メカニズムを基盤とする基本モデルの適用を、意味変化の記述方法の指針として示し、基本モデルを通じた考察を行うことによって、意味変化の従来の研究によっては明らかにし得ない部分も含めた、意味変化現象についての明確な記述を行う事を目指すものである。

---

学位記番号	人博第 490 号	氏名	たかや 高谷 幸
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 佐伯啓思		
論文題目	社会的連帯の再構築 —— 公共圏 / 親密圏としての移住者支援活動		
調査委員	〔主査〕佐伯啓思 〔副査〕吉田 純, 大黒弘慈, 町村敬志 (一橋大学大学院社会学研究科教授)		

---

### 論文要旨

本論文の目的は、日本における移住者支援活動を社会的連帯を脱国民化する公共圏として捉え、その基盤を検討することである。すなわち支援活動が、どのように社会的連帯を脱国民化しているのか、またその手段としての公共圏の基盤について考察する。とりわけ非正規滞在者への対応に焦点をあてる。

まず 1 章では、80 年代以降来日した移住者をめぐる状況の変化と支援活動について概観する。次に 2 章では、本論文の理論的枠組みとして公共圏論を検討する。その後 3 章では、支援活動の論理と構造について検討する。4 章では、非正規滞在の移住労働者の組織化を行ってきた全統一を事例として、また 5 章および 6 章では、在日フィリピン人女性を支援してきた NGO カラカサンを事例として、公共圏の基盤について検討する。これらを通じて、対抗的公共圏の基盤には社会圏と親密圏があるということ、これら複数の位相をもつことによって、支援団体は内部の複数性と外部への対抗性を両立させていることを指摘する。

また社会的連帯との関係で言えば、支援活動は、社会圏を通して移住者を既存の社会的連帯にアクセスさせると同時に、対抗的公共圏を通じて、その社会的連帯をより包摂的なあり方へと変化させようとしている。このとき移住者は、非正規滞在中かどうにかかわりなく「労働者」や「DV 被害者」「シングルマザー」として自己 / 他者呈示する。つまり当事者や支援者は、労働や生活の局面から移住者を認識しており、その認識にもとづいて社会的連帯を脱国民化しようとしているのである。

同時に、支援活動では、こうした支援者の実感に即した形で対面的な連帯関係が築かれている。つまり支援活動は、社会的連帯への影響という局面で見れば、限定的な影響しか与えていないが、その支援のプロセス自体が、社会的連帯を下から鍛え直しているとも言える。このとき連帯とは、抽象的な目標というよりも日々の実践そのものなのである。

---

学位記番号	人博第 491 号	氏名	つねき けんたろう 恒木 健太郎
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 大川 勇		
論文題目	「大塚史学」の展開とその問題意識の変遷 ——「他所者」としての「前期的資本」——		
調査委員	〔主査〕大川 勇 〔副査〕間宮陽介, 大黒弘慈		
専門委員	長屋政勝 (京都大学名誉教授)		

---

### 論文要旨

自律的な近代人としての「中産的生産者層」を理想化した大塚久雄（1907-1996年）の思想は、近代の社会システムへの従属を援護する「動員」の思想として批判されている。しかし、「大塚史学」はグローバル化する世界における「右傾化」を捉える上で重要な視座を提示しうる可能性をもっている。その内容をあきらかにするのが、本論文の目的である（序章）。

大塚の言説は、戦争末期と 1965 年の言説をみると、大塚の主張の力点が「生産力」の増強から「生産倫理」の必要へと移動している。その転機となったのが朝鮮戦争である。かれはそこに「倫理」の欠けた軍事的生産増強と投機バブルの危険を察知してこれを批判した（第 I 章）。

しかし、そこには一貫した根本思想がみられた。それは、「流通」は媒介にすぎず、「生産」にこそ歴史を決定する「主体性」は宿る、というものである。それは戦前に「前期的資本」論および「中産的生産者層」論において展開された（第 II 章）。しかし、戦後「大塚史学批判」のなかで「市場理論」の欠如を指摘された大塚は、そこでの批判内容をとりこんで「局地的市場圏」という戦後「大塚史学」の中核となる概念を形成していった（第 III 章）。そこから大塚はさらに独自の「共同体」論を構築し、投機的資本たる「前期的資本」をうみだす「他所者」の世界を消滅させるために、共同体のもつ「二重構造」の揚棄が必要である、と説いた。そのさい大塚は、「資本主義」への道だけではなく、「社会主義」へと飛躍する方向も考えていた（第 IV 章）。

「大塚史学」は、戦前から存在した国内の経済格差を問題視する視座をもっていたが、これには「オリエンタリズム」や「反ユダヤ主義」という限界がともなっていた（第 V 章）。しかし、「大塚史学」においても継承すべき課題はある。それは、「資本主義の精神」を原理主義的に復活させると「フェシズム」へと陥ると警告であり、これとは別の現実に即した「生産倫理」の確立がもとめられる、というものである（終章）。

---

学位記番号	人博第492号	氏名	工藤 泰子
学位授与の日付	平成22年3月23日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 伊從 勉		
論文題目	近代京都と都市観光 —— 京都における観光行政の誕生と展開 ——		
調査委員	〔主査〕伊從 勉 〔副査〕中嶋 節子, 高木 博志 (人文科学研究科准教授)		

---

### 論文要旨

本研究は、地方自治体における観光行政機関の形成について観光史および都市史研究の立場から論じたものである。とりわけ、国内随一の観光都市であり、全国の自治体に先駆けて観光を専門に扱う機関を行政組織の中に取り入れた京都（市）について言及し、その成立背景および発展経緯を考察した。具体的には、明治初期の博覧会開催によるイベント観光から恒常的な機関である京都市観光課の成立過程、および、観光課成立（1930）から「国際文化観光都市建設法」成立（1950）までの観光行政の発展経緯を以下の構成で論述した。

まず、第1章では明治期の博覧会の開催主体について論じた。京都博覧会の主体となったのは、地元の名望家たちであった。彼らは民間人でありながらも都市行政の重要な任務を担い、かつ、観光行政の中核を占めていたが、その体制は市制施行（1889）後まで存続していた。

第2章では、大正・昭和の御大典時のイベントにおける京都市の関与を明らかにした。大正御大典時の記念博覧会は、もともと京都府が企画したものだったが、図らずも市の事業となり、結果的に、京都市主体の観光行政がはじまる。昭和御大典時（1928）には大正期に引続き、市主催の記念博覧会が開かれるが、それがきっかけとなり、2年後（1930）市観光課が発足する。明治期以降のその場しのぎの誘致事業から、ようやく恒常的な観光行政が開始する。

第3章では、観光課設置以降の「平時」の観光行政を明らかにした。観光課は国や他府県の行政組織と連携を図り、体系的な事業を展開したが、戦争によって旅行が制限されると、国民精神涵養などの国策に乗じた施策を展開した。

第4章では、敗戦後占領下の観光行政について論じた。それは、国民生活の実態からはかけ離れたものであった。「国際観光ホテル整備法」は外客誘致促進が目的であったものの、老舗旅館経営者からの聞き取り調査によれば、その効果はほとんどなかったという。また、戦後復興を目的とした「京都国際文化観光都市建設法」は、市観光課が中心となり市民に対して啓蒙活動を行い、住民投票を呼びかけたが、その結果は散々なものであった。地方自治法に基づく住民投票という一見すると民主的な方法がとられていたものの、実際には行政主導で推進されていったことがわかった。

---

学位記番号	人博第493号	氏名	熊谷瑞恵
学位授与の日付	平成22年3月23日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 山田孝子		
論文題目	中国新疆ウイグル族の食べかたと住まいかたに関する人類学的研究 ——女性のつきあいの場となる住居をめぐって——		
調査委員	〔主査〕山田孝子 〔副査〕田中雅一, 中嶋節子, 帯谷知可 (地域研究統合情報センター准教授)		

---

### 論文要旨

本論文の目的は、中国新疆ウイグル自治区のウルムチ、カシュガルの2つの地域において、食事と空間をめぐるウイグル族の暮らしに注目し、かれらにとって住居がどのような場としてあるのかを民族誌的に描き出すことである。ウイグル族の民族誌的研究は、これまでほとんどおこなわれてきていない。加えて、住居での食べ物、空間をめぐるふるまいの研究は、これまで十分な研究がおこなわれてきたとはいえない。住居の日常は、被調査者の構えなどの点から調査が難しいことが指摘され、また日常の食事はあまりにも身近な対象であったことから、その直接観察に基づく分析はこれまでほとんどおこなわれてきていなかった。またイスラーム文化圏の住居では、男性調査者による調査をおこなえず、女性の存在を含めた住居での日常のふるまいに対する研究はほとんどみられなかった。

本論文は、まずかれらの食事の場がどのように構成されているかを、ムギ食品ナンの食事の場における位置づけに注目し描き出した(第4章)。そこで明らかにされたのは、ムギ食品ナンがコメ食文化とは異なる食事の場を構築していること、その食べかたが居住者、訪問者を区別しない、居合わせた人が食べるという食べかたによって構成されていたという点である(第5章)。そうした食事の場における居住者と訪問者の関係が、住居をどのような場としているのかを明らかにするため、本論文は住居内における空間の意味に注目した(第6章)。ウイグル族の住居では、部屋同士の区別を、名称、用途からは確認することができなかった。そこでは訪問者を含めた寝室における男女の区別のみが確認されたため、本論文は、訪問者層の男女の区別に注目し分析をおこなった(第7章)。その結果、住居は、女性が女性を迎え、また女性がつきあいのためにでかけていく、性の区別によってつくられた、女性のつきあい空間として見出すことができた。以上のように、食べかたから人間関係を分析し、空間の使われかたからイスラーム文化圏の住居の意味を描き出した。

---

学位記番号	人博第494号	氏名	奥住 聡
学位授与の日付	平成22年3月23日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 阪上雅昭		
論文題目	<b>Theoretical Modeling of the Charging and Structure Evolution of Dust Aggregates in Protoplanetary Disks : Possible Discovery of an Electrostatic Barrier Against Dust Growth</b> (原子惑星系円盤における塵粒子集合体の帯電と構造進化の理論的モデル化：塵粒子成長に対する静電障壁の発見の可能性)		
調査委員	[主査] 阪上雅昭 [副査] 小木曾 哲, 木下俊哉, 野村英子 (理学研究科助教)		

---

### 論文要旨

現在の標準的な惑星形成シナリオでは、固体天体形成の第一段階はサブミクロンサイズの塵粒子（ダスト）の合体成長である。ダストの合体成長は惑星形成理論において最も解明の進んでいない部分の1つであり、進化経路を決定づける物理過程の洗い出しとそれらの現実的なモデル化の必要性が高まっている。

本研究の目的は、従来のダスト合体成長理論において無視されてきた、ダストの帯電とその影響を理論的に明らかにすることである。ダストの合体成長の舞台である原始惑星系円盤は、宇宙線などの高エネルギー粒子にさらされ弱く電離していると考えられている。完全電離した通常のプラズマ中では、ダストは負に偏って帯電することが知られている。このような同符号帯電は一般にダストの合体成長の障壁となるが、極めて弱電離である円盤中でダストはどの程度帯電しうるのか、その帯電量はダストの成長進化に影響を与えうるかどうかは全く明らかでなかった。

本研究ではまず、弱電離ガス中でのダストの帯電状態を解析的に扱える理論モデルを世界で初めて構築した。従来の煩雑な電荷反応方程式系を整理し、ダストの帯電量とガス電離度の無矛盾な解析解を導いた。この解析解から、ダストの平均サイズが小さい場合は完全電離プラズマ中での帯電量を大幅に下回る一方、成長とともに帯電量は完全電離プラズマ極限へ移行するという一般的な傾向を明らかにした。

次に、ダストの合体成長に伴う構造進化の理論的モデル化を行った。低速度で衝突する微小なダストは、成長に伴い非常に高い空隙率をもつことが知られている。高い空隙率は広い表面積を意味し、ガス中でのダストの衝突速度と電荷捕獲の両方に対して影響を及ぼす。このため、ダストの空隙率進化の現実的なモデル化は合体成長に対する静電障壁の影響を解明するために必要不可欠である。本研究では、ダストの2体衝突に伴う空隙率の増加量をN体数値シミュレーションの結果から経験的に公式化し、さらに、質量分布の進化と内部密度分布の進化を矛盾無く追跡できる統計的数値計算法を開発した。テスト計算の結果、これらの数値手法から得られる空隙率進化の様子は実験室実験などと整合的であることを確認した。

さらに、上記の2つの研究を総合し、帯電と静電相互作用の効果を取り入れたダストの合体成長シミュレーションを行った。この結果、惑星形成領域の大部分（およそ1-100AU）で、ダストのその場成長は極めて早い段階で静電反発によって“凍結”してしまう可能性を明らかにした。この結果は、帯電がダストを従来のシナリオと全く異なる進化経路へと導くことを示唆している。



---

学位記番号	人博第 495 号	氏名	かわい ようすけ 河井 洋輔
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 阪上 雅昭		
論文題目	非平衡多粒子系の緩和過程を渦運動・乱流の両視点より構造解析する非中性プラズマ実験		
調査委員	〔主査〕 阪上 雅昭 〔副査〕 宮本 嘉久, 木下 俊哉		

---

### 論文要旨

強く磁化された純電子プラズマの巨視的な運動が、2次元理想流体の運動と等価であることを利用し、渦度＝電子密度の空間分布を高精度の観測系で可視的に観測、画像データに対して詳細な解析を行うことで、渦間の相互作用を介した2次元乱流の緩和過程を、大規模な渦構造から微細な乱流構造に至る広い空間スケールにおいて実験的に展開した。

初期条件としてリング状に形成された純電子プラズマは、流れ場のシアにより攪乱に対し不安定となり、密度変調の非線形成長によって、複数個の渦塊構造を形成する。形成された渦は相互に合体を繰り返す。単一の安定な終状態へと緩和する。

このような乱流緩和過程において観測された、電子密度分布の時間発展に対し **Fourier** 解析を適用し、波数空間上におけるエネルギーや渦度の流れを追跡した。結果、渦度が入射された波数領域からより高次波数側へと流れている様子が観測され、この緩和過程が、定性的には乱流理論によって予測されるエンストロフィーカスケード過程に則って進行していることが確かめられた。しかしながら、強い渦度を持つ **coherent** な渦構造により渦度の輸送は阻害され、波数スペクトルの形状が急峻となるなど、理論モデルとは異なる現象も観測された。

このような波数スペクトルのダイナミクスを、実空間上における渦運動と直接対応付けて考えるため、実・波数両空間上において局所的な分解能を有する **wavelet** 解析を実験データに対し適用した。結果、電子密度分布中に、乱流構造に特徴的な空間的な間欠性が存在することが確認され、さらに、波数空間上において観測されたエンストロフィーカスケードが、実空間上では渦間の合体に伴う密度構造の微細化に対応していることが示された。さらに、**wavelet** の特性を利用し、波数スペクトルに影響を与えることなく、密度分布から特定の構造を抽出することに成功した。特に、密度分布を **coherent** な渦構造と乱流構造とに明確に分離することで、**coherent** 構造がスペクトルの急峻化に大きく寄与していることを確かめた。さらに、残りの乱流構造から得られたスペクトルが、理想的な乱流のスペクトルと一致するとの結果を得た。

---

学位記番号	人博第 496 号	氏名	田中 洋
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 市岡 孝朗		
論文題目	Effects of an ant symbiont ( <i>Crematogaster difformis</i> ) of epiphytic ferns on herbivores and lianas on emergent trees in a tropical rainforest (熱帯雨林の林冠突出木に着生するシダ類の共生アリ(シダスミシリアゲアリ)が植食者をつる植物に及ぼす影響)		
調査委員	〔主査〕市岡 孝朗 〔副査〕松井 正文, 加藤 真, 市野 隆雄 (信州大学理学部教授)		

---

### 論文要旨

熱帯雨林の林冠には、多様な種で構成される樹上性のアリ類群集が生息している。しかし、それらの樹上性アリ類が林冠に展開する生物間相互作用網に対してどのような影響をもっているのかを定量的、実証的に明らかにした研究はそれほど多くない。そこで、本研究では、典型的な樹上性のアリである、着生シダ類のアリ植物と共生するアリが、林冠を構成する樹木に対する植食者の活動やそこに伸張しようとするつる植物の成長に対して与える影響を実証的に明らかにすることを目的とした。

東南アジアの熱帯雨林域の中心部に位置する、ボルネオ島マレーシア・サラワク州のランビル・ヒルズ国立公園を調査地とし、アリ植物化した着生シダ 2 種 (アリビカクシダ *Platyserium* sp. とアリウラボシ *Lecanopteris* sp.) と、それらの茎内部の空洞に営巣して共生するシダスミシリアゲアリ (*Crematogaster difformis*) を対象とした。

林冠突出木におけるアリ類空間分布様式を調べたところ、樹上性のアリ類のなかではシダスミシリアゲアリがより多くの樹木個体で観察されるとともに、このアリは樹冠の葉の先から幹の上部にわたる広い範囲を絶えず徘徊してなわばりを形成することが明らかになった。このアリを樹冠の一部の枝から実験的に排除すると、新葉に対する植食性昆虫による食害が有意に増加した。また、林冠に伸張しているつる植物を実験的にこのアリのなわばり内に配置すると、顎による葉や茎への攻撃によってアリはつる植物をなわばりから排除した。2 種のシダの着生が観察されている樹種において、これらのシダが発生している林冠突出木個体では発生していない個体に比べて、樹冠まで到達するつる植物の発生率が有意に低かった。

これらの結果から、シダスミシリアゲアリは、営巣している林冠突出木に対する葉食性昆虫の食害と、林冠突出木の樹冠部分へのつる植物の伸張を強く制御することが示された。

学位記番号	人博第 497 号	氏名	吉川夏彦
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 松井正文		
論文題目	ハコネサンショウウオの系統分類学的研究		
調査委員	〔主査〕松井正文 〔副査〕加藤 真、市岡孝朗		

### 論文要旨

北東アジアに固有なハコネサンショウウオ属 2 種の系統関係と、それぞれの種内の遺伝的変異の実態を明らかにし、進化史を推定するとともに分類学的考察を行った。まず mtDNA の塩基配列を用いて系統解析を行った結果、中国大陸産のハコネサンショウウオモドキは大きく分化した 3 系統からなる側系統群となり、隠蔽種を含むことが示唆された。日本産のハコネサンショウウオは単系統群をなしたが、内部には 4 つのクレード (I から IV) と、複数のサブクレードが認められた。これらのうち、クレード III と IV は西日本の複数地点で同所的に分布していた。分岐年代推定の結果、この属の分化開始は後期中新世にさかのぼること、種内の分化パターンは日本列島形成期の地史的イベントの影響を強く受けたことが示唆された。次に種内のアロザイム変異を調べた結果、mtDNA で認められたクレードまたはサブクレードとほぼ一致する 6 つの遺伝型 (東北北部型、東北南部型、筑波型、本州西南型、近畿型、四国型) が認められた。これら 6 遺伝型間の遺伝的距離は、サンショウウオ類の近縁種間で一般に観察される値と同等以上であった。中国山地では本州西南型と四国型が同所的に分布し、生殖的に隔離されていると推定された。本州西南型は近畿地方で近畿型とも同所的に分布するが、これらの間にも生殖隔離が存在すると推定された。本州東北部で側所的に分布する東北北部型、東北南部型、本州西南型は連続的に分布しながらも遺伝的には不連続性を示し、それぞれが生殖的に隔離されていることが示唆された。これらの結果はハコネサンショウウオの内部に複数の隠蔽種が存在することを示すものである。本種の基準産地である箱根産の個体群は本州西南型であることから、この遺伝型が真のハコネサンショウウオであり、他は別種であると考えられる。これらの分類学的位置の決定には、形態・生態調査も含めたさらなる研究が必要である。

---

学位記番号	人博第 498 号	氏名	中 西 貴 之
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 田部勢津久		
論文題目	Development of Eu (II) Doped Glass Ceramic Phosphors and Material Design for Solid-State Lighting (固体照明用 $\text{Eu}^{2+}$ 付活結晶化ガラス蛍光体の開発と材料設計)		
調査委員	〔主査〕田部勢津久 〔副査〕杉山雅人, 木下俊哉		

---

### 論文要旨

本論文では、高出力白色発光ダイオード (LED) 用の蛍光体材料としての Eu 添加結晶化ガラス (ガラスと結晶の複合材料系) の材料設計と開発を行い、その発光特性を明らかにした。また  $\text{Eu}^{2+}$  蛍光体の電子構造を評価する新しい手法の確立を行った。

第 1 章では、現在の照明用白色 LED の現状および問題点を概説した後、本研究における結晶化ガラスの優位性について解説した。

第 2 章では、 $\text{BaO-SiO}_2$  系ガラスから蛍光体結晶の  $\beta\text{-BaSi}_2\text{O}_5 : \text{Eu}^{2+}$  が析出する結晶化ガラスの作製を行った。その発光効率は、結晶と同等程度の高い量子効率 (70%) を示すことを明らかにした。

第 3 章では、結晶化ガラスの結晶核生成および結晶成長が、その発光特性に与える影響を明らかにした。結晶核生成・成長過程を制御することで、析出結晶量が変化し、それに伴い  $\text{Eu}^{2+}$  の発光効率も増減することを明らかにした。

第 4 章では、“フローゾン・ソルベ法”を考案し、 $\beta\text{-Ca}_2\text{SiO}_4$  とガラス相からなる新規の結晶化ガラス蛍光体を作製した。その熱処理により  $\beta\text{-Ca}_2\text{SiO}_4 : \text{Eu}^{2+}$  (緑帯発光) と  $\text{Ca}_3\text{Si}_2\text{O}_7 : \text{Eu}^{2+}$  (赤帯発光) からなる 2 結晶析出結晶化ガラスの作製に成功した。紫外線励起により可視領域に幅広い白色スペクトルを示すことを明らかにした。

第 5 章では、還元条件を変え作成した Eu 添加  $\beta\text{-Ca}_2\text{SiO}_4$  の Eu(II)/(III) 価数比を  $^{151}\text{Eu}$  Mössbauer 分光法を用いて評価し、その発光効率と Eu 価数の関係を調べた。その発光効率は Eu(II) 価数比率の増加に対し、指数的な上昇を示すことを明らかにした。

第 6 章では、Eu の価数状態がホスト結晶である  $\text{Ca}_2\text{SiO}_4$  の相変化に与える影響を調べた。Eu(II) の価数比率が 95% を超えると安定に得られる結晶相は、 $\beta\text{-Ca}_2\text{SiO}_4$  から  $\gamma\text{-Ca}_2\text{SiO}_4$  に変わり、微量成分である Eu 価数が相転移機構に強い関わりを持つことを明らかにした。

第 7 章では、局在した  $\text{Eu}^{2+}$  励起状態と非局在の母体伝導帯との相関を光電流の測定により、実験的に明らかにした。その励起波長依存性は、 $\text{Eu}^{2+}$  発光励起スペクトルと形状が一致することを示し、 $\text{Eu}^{2+}$  励起状態と伝導帯の関係を明らかにした。

以上、本論文では、 $\text{Eu}^{2+}$  添加アルカリ土類珪酸塩結晶化ガラス蛍光材料を創製し、また  $\text{Eu}^{2+}$  蛍光体の特性を評価する新規手法の提案および、その有用性を明らかにした。

学位記番号	人博第499号	氏名	藤田俊輔
学位授与の日付	平成22年3月23日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 田部勢津久		
論文題目	Development of Rare Earth Doped Active Glass-Ceramics for White Light Emitting Diode and Optical Telecommunications (白色発光ダイオードおよび光通信用希土類含有アクティブ結晶化ガラスの開発)		
調査委員	〔主査〕田部勢津久 〔副査〕杉山雅人, 木下俊哉		

### 論文要旨

本学位論文では、 $\text{Ce}^{3+}$  イオン含有 YAG (Yttrium Aluminum Garnet) 結晶化ガラス蛍光体の創製とその白色発光ダイオード (LED) 照明への応用、および  $\text{Er}^{3+}$  イオン含有 YAG および LAS (Lithium Aluminum Silicate) 結晶化ガラスの光通信における光増幅器への応用検討を行った。

第1章では、本論文研究の背景と目的を述べた。特に、白色 LED において深刻な問題である、ハイパワー LED チップの熱や光による樹脂マトリックスの劣化に対し、「All inorganic solution」として樹脂を用いない全く新しい蛍光体を創製することの意義、希土類イオンの光学遷移の基本原則、独自構築した積分球を用いた光学評価系について述べた。

第2章では、結晶化ガラス (Glass-Ceramic: GC) プロセスを用いてガラスマトリックス中に Ce: YAG 微結晶を単相でかつ均一に析出させた GC 蛍光体の創製に世界で初めて成功した。その発光特性が市販白色 LED と同等で、かつ、耐熱性、耐水性においてははるかに優れていることを実験的に証明した。

第3章では、Ce: YAG-GC を青色 LED で背面励起した時の発光色が、試料の厚みおよび結晶化前のガラス組成で制御できることを明らかにした。YAG 結晶中の Y サイトに Gd を固溶させることで発光波長が長波長シフトし、より自然光に近い白色光を得ることに成功した。

第4章では、Ce: YAG-GC 蛍光体の温度消光特性について調査し、結晶化過程でガラスマトリックス成分 (Si, Li) が結晶相に固溶することで失活中心を生成し、これが温度消光を促進させている可能性があることを指摘した。

第5章では、Ce: YAG-GC 蛍光体中の光散乱が発光効率に与える影響を調査した。その結果、光散乱係数の減少に伴う散乱損失の減少が発光効率向上に寄与することを実測および Mie 散乱理論の双方で確認した。

第6章では、 $\text{Er}^{3+}$  イオン含有 LAS-GC を作製し、その発光挙動を結晶化の前後で評価した。結晶化によって  ${}^4\text{I}_{13/2}$ - ${}^4\text{I}_{15/2}$  遷移に伴う  $1.5\mu\text{m}$  帯の吸収断面積は増加したが量子効率は低下 (発光強度が低下) した。結晶化に伴う  $\text{Er}^{3+}$  イオン、OH 基のガラスマトリックス中への濃縮による無輻射緩和率の増加によるものと考察した。

第7章では、U バンド光増幅器への応用が期待される  $\text{Er}^{3+}$  イオン含有 YAG 微結晶をガラスマトリックス中に析出させることに成功した。その発光特性、微細構造の調査より、 $\text{Er}^{3+}$  イオンが YAG 相に選択的に固溶していること、その発光が通常のリシカガラス中のそれに比べ  $1.45\sim 1.67\mu\text{m}$  にかけて幅広い発光を有することを見出した。

---

学位記番号	人博第 500 号	氏名	前田直子
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	文化・地域環境学専攻 西井正弘		
論文題目	人権条約における個人申立・通報制度の発展と課題 —— 国際的実施と国内的実施の相乗効果による実効性確保 ——		
調査委員	〔主査〕西井正弘 〔副査〕西村 稔, 位田隆一 (法学研究科)		

---

### 論文要旨

本稿は、ヨーロッパ人権条約および自由権規約における個人申立・通報手続を素材として、その実効性確保への課題究明を目的とした。検討には ① 国際的実施メカニズムの国内的実施メカニズムに対する強制力および誘引力、② 国際的手続の不完全性、③ 国際的手続の機能・性質変化を中心的視座に置き、それらの個人申立・通報制度の実効性に対する有機的關係について考察した。

第 1 章では、ヨーロッパ人権条約のイギリスにおける国内的実施状況から、人権条約上の国家の義務の性質・内容を検討し、いわゆる「結果の義務」から、国内的実施の具体的方法や条約解釈原理への準拠を求める「手段の義務」に変化していることを明らかにした。かつて人権問題が国内管轄事項であった段階から、国際的「人権」が国内においても考慮されるべきものとなった段階を経て、現在は、人権条約上の権利カタログや規範・原則が、強制力をもって、国内法の解釈基準となる段階にまで到達している。

第 2 章では、受理可能性要件の解釈・適用を批判的に考察し、手続の内在的かつ外在的な不完全性について示した。受理可能性要件は、実体的権利規定と切り離しては検討できない性質もあり、本案審査内容への勇み足や、比例性原則、「評価の余地」などの実体的規定の解釈原理の影響を受けることにより、一般国際法とは異なる解釈の危険性も明らかにした。解釈・適用についての妥当性や一貫性が、当事者の信頼を得ることを通じて条約遵守の誘引力となり、手続の実効性を高める。

第 3 章では、判決・見解の履行確保手段の発展と機能的変遷について扱い、履行確保には、判決・見解自体の法的妥当性、政治的圧力による判決履行監視も有効であるが、とりわけ近年の履行確保手続が、司法的・準司法的制度を基盤とすること、個人救済から一般的救済の重視へと機能変化の様相を呈していることを指摘した。

人権条約実施の実効性確保には、国際的実施および国内的実施の間に相乗的实施効果の構築が不可欠である。また個人的救済の実効性と一般的救済の実効性は相反するものではないが、個人申立・通報制度の趣旨および目的に立ち返る時、個人救済の重要性を問い直さなければならない。

学位記番号	人博第 501 号	氏名	さばえひでき樹
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 岡田 温 司		
論文題目	芸術と政治：ファシズム期イタリアの造形芸術とその思想に関する研究		
調査委員	〔主査〕岡田 温 司 〔副査〕篠原 資 明, 多賀 茂, 和田 忠 彦 (東京外国語大学大学院総合国際学研究所教授)		

### 論文要旨

イタリアのファシズムは、他の全体主義国家とまったく異なる支配の様態であった。特に文化の領域においてその特異性が顕著であったと言える。ナチズムやスターリニズムが弾圧の対象としたモダニズム芸術は、イタリア・ファシズム下において否定されることはなく、政府主催の展覧会の開催に大きく貢献した。また、前世紀初頭から興隆した雑誌文化を背景にして、新しい時代にふさわしい表現のあり方について、芸術家や批評家たちのあいだで激しく議論が交わされていた。他のヨーロッパ諸国と比べて近代化に大きく遅れをとったイタリアは、ファシズムとモダニズムを同時に経験した特異な近代国家であった。

こうした「自由な」文化的様相は、従来、ファシズム政権による民衆や知識人の同意獲得として説明されてきたが、本論文は、ファシズム体制成立からその末期にいたるまでに書かれた造形芸術批評とその思想を読解することで、イタリア・ファシズム文化の形成の背後にあるいっそう複雑な要因やメカニズムを明らかにした。

第 1 章では、反体制的活動家が著した絵画論の受容に着目し、その著作が書き手の政治的立場を前提として批判に曝された点を明らかにした。この事実は、文化に対する政治の暴力的な介入を如実に示している。逆に、その政治権力がいかに芸術や文化を統御し、管理しようとしたのかを、文化政策に手腕を振るったジュゼッペ・ボッタイの理論的テキストから分析した (第 2 章と第 5 章)。彼の考えによれば、政治と芸術は混同されるべきではなく、むしろ競合関係を保持すべきだという。だが、芸術家や批評家たちの方が、みずから進んで政治権力に参与し、この区別を踏み越えようとする傾向が、美術史学や近代建築など、政治とは無関係に思える領域で打ち出されていた (第 3 章と第 4 章)。このように、容易に図式化しえない政治と芸術との複雑な絡み合いが、イタリア・ファシズム文化を多層的で重層的なものにしていたのだが、それは、両大戦間期を生きた表現者たちが、様式なき時代に、それでも新たな「様式」を追い求めたことによって形成されたのである。

---

学位記番号	人博第 502 号	氏名	いわ なかのぶ まさ 岩 中 伸 壮
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 林 達也		
論文題目	Leucine modulates contraction- and insulin-stimulated glucose transport and upstream signaling events in skeletal muscle (筋収縮及びインスリンによる骨格筋糖輸送活性化とそのシグナル伝達におけるロイシンの調節作用に関する研究)		
調査委員	〔主査〕林 達也 〔副査〕森谷敏夫, 石原昭彦		

---

### 論文要旨

本研究ではラット単離骨格筋を用いたインキュベーション実験系において、ロイシンが筋収縮及びインスリンによる糖輸送活性化とそのシグナル伝達分子に及ぼす影響を検討した。まず、ロイシン存在下において、電気的筋収縮が骨格筋糖輸送に与える影響を検討したところ、糖輸送はロイシン非存在下での筋収縮に比べて有意に促進し、同時に 5' AMP-activated protein kinase (AMPK) Thr<sup>172</sup> リン酸化, p70 S6 kinase (p70S6K) Thr<sup>389</sup> リン酸化の有意な促進が観察された。AMPK リン酸化は細胞内エネルギー状態による調節を受けるため、アデノシン 3 リン酸, クレアチンリン酸, グリコーゲン濃度を計測したが変化は観察されず、細胞内エネルギーに依存した AMPK リン酸化ではないと考えられた。そこで細胞内エネルギーに依存しない AMPK 上流分子 Ca<sup>2+</sup>/calmodulin-dependent protein kinase kinase (CaMKK) の阻害剤である STO-609 を作用させたところ、ロイシンの糖輸送促進効果と AMPK リン酸化促進効果はともに消失した。また、p70S6K の阻害剤であるラパマイシンを作用させたところ、ロイシンによる糖輸送促進効果と AMPK リン酸化促進効果はともに消失した。次に、ロイシン存在下においてインスリンが糖輸送に与える影響を検討したところ、ロイシン非存在下に比べて糖輸送は抑制され、同時に Akt Thr<sup>473</sup> リン酸化抑制と insulin receptor substrate 1 (IRS1) Ser<sup>636/639</sup> リン酸化, p70S6K Thr<sup>389</sup> リン酸化の促進が観察された。これらの効果はすべてラパマイシンを作用させることにより消失した。以上の結果より、ロイシンは筋収縮による糖輸送に対しては促進効果、インスリンによる糖輸送に対しては抑制効果を示すこと、そして、これらの効果の発現には p70S6K を介するシグナル伝達が中心的役割を果たすことが考えられた。また、筋収縮に対する促進効果には CaMKK を介した AMPK 活性亢進が、インスリンに対する抑制効果においては IRS1 リン酸化を介した Akt 活性の抑制が関与することが示唆された。



---

学位記番号	人博第 503 号	氏名	こく ぶ まさ ひろ 國 部 雅 大
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 小田 伸 午		
論文題目	The role of eye movements and fixation in the control of fast and accurate hand movements (素早く正確な手運動の制御における眼球運動および注視の役割)		
調査委員	〔主査〕小田 伸 午 〔副査〕松村 道一, 齋木 潤, 神崎 素樹		

---

### 論文要旨

ヒトが外界に対して素早く正確な手の運動を行う際には、視覚情報を的確に捉えるために眼球運動および注視位置が重要な役割を果たすと考えられる。本論文では、眼球運動および視野空間内での注視位置を変化させたときの手運動反応を調べることにより、素早く正確な手運動の運動制御に眼球運動や注視状態が与える影響を検討することを目的とした。

実験 1 および実験 2 では、2 次元平面内における注視の移動が手指の反応および到達運動に与える影響を調べた。周辺視野に呈示された視覚刺激に対するサッケード眼球運動とキー押し運動による反応時間課題を同時に行った結果、キー押し反応が遅延したことから、眼球運動指令による干渉作用を受けた可能性が示唆された。また、バレーボール選手は一般成人に比べてキー押し反応の遅延の程度が小さい値を示した。次に、動作振幅の異なる左右ターゲットへ向けての両手同時到達運動課題を行う際に、ターゲット注視の順序を教示した結果、後に注視したターゲットに対する到達運動が遅くなり到達位置の変動が大きくなること、および短距離ターゲットを注視できない場合にはその振幅がオーバーシュートすることが明らかとなった。

実験 3 および実験 4 では、奥行き方向を含めた 3 次元空間における注視距離（位置）の遠近が手指反応および到達運動に与える影響を調べた。その結果、周辺視野の視覚刺激に対するキー離し反応時間課題において、呈示刺激より遠方を注視した条件では、近方を注視した条件に比べ反応時間が短縮した。また、奥行き方向に配置されたターゲットへの手の到達運動課題において、予め遠方を注視しておくことで、到達時刻が早くなることが示された。

以上、本論文における一連の実験結果から、平面内および空間内の適切な注視位置へ向けて眼球運動を行うことにより、素早く正確な手運動の制御が可能になることが示された。

---

学位記番号	人博第 504 号	氏名	進 矢 正 宏
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 小田 伸 午		
論文題目	歩行中の踏み外しに対する姿勢制御活動		
調査委員	〔主査〕小田伸午 〔副査〕松村道一, 森谷敏夫, 神崎素樹		

---

### 論文要旨

申請者は歩行中の踏み外しという外乱に注目し、踏み外す可能性を全く知らなかった際および踏み外す可能性を予め知っていた際の姿勢制御戦略について研究を行った。第二章では、7名の成人男性を対象に、通常通り歩いてくださいとの教示の下、完全に予測不可能な踏み外し中の筋電図および三次元動作データを計測した。踏み外した瞬間から踏み外した足の腓腹筋の活動開始までの潜時は 97ms であり、前脛骨筋の潜時や実際の着地までの時間と比較して有意に短かった。この結果は、踏み外しに対して歩行を停止し足先を下げるという筋応答が、予測と実際の感覚入力の差分情報に基づいて誘発されたということを示唆している。第三章では、18名の成人男性を対象に、踏み外しに関する事前知識が姿勢制御戦略と素早い筋応答に与える影響を調査した。歩行路に段差があるかもしれないという踏み外しに関する事前知識を持っていた際には、両脚支持期が延長し足裏がより水平に近い着地を行っていた。踏み外し後の筋応答は、事前知識の有無に関わらず同様のパターンを示したが、事前知識を持っていた際には 20ms 程度早いタイミングで活動が開始されていた。踏み外しの可能性に関する事前知識を持っていたが実際には段差がなかった条件では、後ろ足を離地するための足関節底屈筋の活動が着地の 40-60ms 後に誘発された。さらに前足の前脛骨筋および大腿二頭筋にも顕著な活動が観察された。これは歩行を再開する筋活動パターンであると考えられる。これらの結果から、踏み外すかもしれないという事前知識があった際には、踏み外した時のための歩行停止戦略と、踏み外さなかった時のための歩行再開戦略の両方をプレプログラムし、実際の物理的状況に応じていずれかが誘発される“switch-case”型の姿勢制御戦略の存在が示唆された。

---

学位記番号	人博第 505 号	氏名	朴 白 順
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 大東 祥 孝		
論文題目	自伝的記憶の神経心理学的研究 —— 想起意識 <i>Autonoetic consciousness</i> を中心に ——		
調査委員	〔主査〕大東 祥 孝 〔副査〕齋 木 潤, 船橋新太郎		

---

### 論文要旨

大脳損傷により記憶障害を呈した健忘症例では、記銘力の低下および記憶情報の想起困難を示すと同時に、記憶情報に伴うと考えられている想起意識の低下を示すが、後者が健忘の本質であると考えられている。本研究は、記憶障害を呈した症例を対象に、自伝的記憶再生における想起過程の検討を通して、想起特性の再考を行うことを目的とした。具体的には、自伝的記憶再生に伴う、想起意識をよりセンシティブに検出可能にする方法を検討することにより、健忘症例における想起過程の特性を検証し、その発現機序における議論の一助としたい。また、自伝的記憶想起における意味的記憶の役割の検討を通して、自伝的記憶の想起特性の検証を試みた。

第一の検討では、健忘症例におけるエピソード的（想起意識を伴う）想起特性を明らかにすることを目的に、15項目構成の想起特性評定質問紙を作成し、項目間相関検討を行った。結果から、重篤な健忘症例では、主観的な想起意識は保たれているものの、健常被験者のような視覚イメージに特徴づけられた想起過程ではないことが示された。第二の検討では、過去の自伝的記憶のみをまったく想起できない、機能的逆行性健忘症例における想起過程の検討を行った。記憶再生課題では顕著な低下を示したものの、部分的な記憶の想起が可能であり、それに対する鮮明度評定において健常被験者と類似の評定結果を、また同じ記憶情報に対する健忘回復後の鮮明度評定においても、健忘期との間で類似の結果を示したことから、想起意識が障害されていない可能性が示唆された。第三の検討では、意味記憶が選択的に障害される意味性認知症例における、自伝的記憶再生課題と有名人の相貌を刺激とした視覚性課題の検討、および重篤な健忘症例における意味的記憶課題の検討を行った。前者の結果からは、自伝的記憶の比較的良好な保持と、相貌逆行性検査における低下が示された。また重篤な健忘2症例の結果では、4種類の意味的記憶課題ほぼすべてにおいて両者の成績で差がみとめられ、このことは病変部位の広がり（右前頭一側頭構造）との関連を示唆するものであった。

以上の検討により、エピソード的想起過程は視覚イメージに依拠した想起意識が伴うことにより生起するが、健忘症例では想起過程に視覚イメージを伴わないことが示され、この結果において前頭葉内側および底面領域が重要部位であることが示唆された。また使用された15項目の評定質問紙は、想起意識を測定することにおいて有効な手段であることが確かめられた。健忘の本質に横たわっている想起意識障害の視点から見た機能的逆行性健忘例における結果は、過去経験の想起困難が想起意識そのものの障害ではない可能性を示唆した。最後に、前頭側頭型認知症例および重篤な健忘症例における検討により、自伝的記憶が、意味的記憶に依存しており、特にそのことは、側頭葉前部および下部、前頭葉底面と関連していることが示唆された。

---

学位記番号	人博第 506 号	氏名	藤井進也
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 小田 伸午		
論文題目	熟練ドラム奏者の最速リズム運動制御機構		
調査委員	〔主査〕小田伸午 〔副査〕松村道一, 森谷敏夫, 神崎素樹		

---

### 論文要旨

本学位申請論文は、熟練ドラム奏者の最速リズム運動制御機構について論じたものであり、以下の 9 章から構成される。第 1 章では、研究の背景、研究の意義、分析の視座、研究目的、そして論文構成について述べた。第 2 章では、最速リズム運動に関する先行研究を概略した。第 3 章では、スティック使用がドラム奏者の片手最速リズム運動パフォーマンスに与える影響について調査し、スティック使用がタップ力の増大とタップ間隔の安定化をもたらすことを示した。第 4 章では、ドラム奏者と非ドラム奏者の片手最速リズム運動パフォーマンスを調査し、ドラム奏者が非ドラム奏者に比べて、タップ間隔とタップ力が安定しており、タップ速度の左右差が小さいことを明らかにした。第 5 章では、ドラム奏者と非ドラム奏者の片手最速リズム運動中の前腕筋表面筋電図活動を調査し、ドラム奏者は非ドラム奏者に比べて手首関節屈筋群－伸筋群間の共収縮水準が低く、屈筋群の活動タイミングが安定していることを明らかにした。第 6 章では、世界最速ドラム奏者の運動パフォーマンスと前腕筋表面筋電図活動について調査し、世界最速ドラム奏者は、10Hz 周期の動作中であっても、安定したタップ間隔と極めて明確な屈筋群－伸筋群間の交互収縮パターンを示すことを明らかにした。第 7 章では、スティック使用がドラム奏者の両手最速リズム運動に与える影響について調査し、スティックの使用がタップ力の増大と両手協調パターンの安定化をもたらすことを示した。第 8 章では、ドラム奏者と非ドラム奏者の両手最速リズム運動中の左右肢の協調パターンを、微分方程式の時間発展として数理的に記述することに成功した。また、数理モデリングを通して、両手最速リズム運動の熟達化を司る決定的な変数が、最速リズム運動に特異的な手の機能的左右差であることを明らかにした。第 9 章では、本研究から得られた以上の結果を総括し結語を述べた。

学位記番号	人博第 507 号	氏名	馬 嘯 <sup>マ ショウ</sup>
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 林 達也		
論文題目	Active Ingredient of Chinese Medicinal Plant Rapidly Activates 5'AMP-Activated Protein Kinase in Skeletal Muscle (中国由来薬用植物成分による骨格筋 5'AMP-活性化プロテインキナーゼの急性活性化作用に関する研究)		
調査委員	〔主査〕林 達也 〔副査〕津田 謹輔, 森谷 敏夫		

### 論文要旨

本研究では、古来より抗糖尿病作用を有する薬用植物として利用されてきた桑葉 (*Morus alba leaf*) と黄連 (*Coptis chinensis*) に焦点をあて、体内最大の代謝器官である骨格筋を対象に、糖・脂質・エネルギー代謝活性化に深く関与する蛋白リン酸化酵素 5'AMP-Activated Protein Kinase (AMPK) への影響を検証した。桑葉についての検討は、乾燥桑葉を 85°C の温水に浸して得た抽出物をクレブス緩衝液に溶解し、その中でラットから単離した滑車上筋をインキュベートする手法を用いた。その結果、桑葉抽出物は AMPK $\alpha$  サブユニットリン酸化を刺激開始 15 分以内に促進し、その効果は時間・濃度依存性を持って 60 分間以上にわたり持続した。骨格筋には  $\alpha 1$ ,  $\alpha 2$  の 2 種類の活性サブユニットが存在するが、桑葉抽出物はこの両者をともに活性化した。また桑葉抽出物は、AMPK の直接基質であり糖輸送担体 GLUT4 のトランスロケーション活性化に関与する AS160 をリン酸化するとともに、インスリン非依存的糖輸送活性を有意に促進した。なお、AMPK 活性は筋細胞のエネルギー状態低下によって亢進することが知られているが、桑葉抽出物はエネルギー指標に影響を与えなかった。黄連については、黄連が含有する主要アルカロイドのベルベリンをクレブス緩衝液に溶解し、その中でラット滑車上筋とヒラメ筋をインキュベートする手法を用いて検討した。その結果、桑葉抽出物と同様に、AMPK リン酸化が時間・濃度依存的に 60 分以上持続し、 $\alpha 1$ ,  $\alpha 2$  両アイソフォームの活性化、AS160 リン酸化亢進、インスリン非依存的糖輸送活性の亢進を認めた。しかし桑葉と異なり、クレアチンリン酸濃度が有意に低下し、筋細胞のエネルギー状態の低下が示唆された。以上の結果は、桑葉が細胞内エネルギー低下に依存しないメカニズム、黄連がエネルギー低下に依存するメカニズムを介して AMPK を活性化することを示すとともに、両者の抗糖尿病作用が骨格筋 AMPK の活性化を介して生じていることを示唆するものである。

---

学位記番号	人博第 508 号	氏名	山本哲也
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 齋木 潤		
論文題目	ヒト奥行き知覚過程における多重性に関する脳機能イメージング法による研究		
調査委員	〔主査〕 齋木 潤 〔副査〕 船橋新太郎, 大東 祥孝, 江島 義道 (京都工芸繊維大学学長)		

---

### 論文要旨

ヒトは3次元の外界を2次元の網膜像を通じて知覚している。この時、次元の減少によって奥行き情報は失われてしまうはずであるが、実際に我々の知覚にそのような事態は生じない。これは脳が様々な奥行き手掛かりを利用して奥行き情報を再構築しているからに他ならない。これまでの多くの神経科学的な研究は、奥行き情報がどのような知覚モジュールに分かれて並列的に処理されているのかという経路の分離に関心を払ってきた。しかし、並列的に処理された各々の奥行き手掛かりに関する情報が脳内のどこでどのように統合され、最終的な奥行き知覚に至っているのかという問題に対しては、十分な検証が行われてこなかった。そこで、本研究では、数ある奥行き手掛かりの中でも、手掛かりそのものの処理に関する知見が豊富な運動手掛かりを基軸に、単眼性奥行き手掛かりの統合過程をfMRIを用いて解明することを試みた。

まず、実際の奥行き手掛かり統合過程の検証を行う前に、運動知覚過程のみならず、奥行き知覚過程においても重要な役割を果たすと考えられるMT+をMTとMSTの2つの副領域として同定する実験を行った。単なる同定だけでなく、結果の再現性も確認し、標準的な方法として広く用いられるだけの信頼性も示した。

続いて、視運動の種類毎に対応する奥行き情報処理モジュールが特定の脳領域に存在するかどうかを検証する実験を行った。運動速度勾配が奥行き知覚の手掛かりとなる運動性奥行き効果や運動視差で見られるのと同様に、V3B, LO, MT+を含む外側後側頭領域が運動速度勾配を欠いた立体運動効果においても賦活したことから、この領域で運動手掛かりからの奥行き知覚のための共通的な情報処理が行われている可能性が示唆された。

最後に、運動・形態・テクスチャーという複数の奥行き手掛かりを用い、単眼性奥行き手掛かりというより大きな枠組みで奥行き手掛かり統合過程を明らかにする実験を行った。奥行き知覚の破綻に注目し、3つの奥行き手掛かりを矛盾的に存在させ、視覚刺激の変化に対応する脳活動の変化に加え、視覚刺激の変化に伴う奥行き知覚の変化とこれに対応する脳活動の変化の様子を捉えることを試みた。奥行き知覚に相関した脳活動がV3B, V7, LO, MSTで見られ、これらの領域が単眼的な奥行き情報統合過程に重要な役割を担っていることが示唆された。

---

学位記番号	人博第 509 号	氏名	波多野 (金丸) 敏幸
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生人間学専攻 山梨 正明		
論文題目	日常言語の意味拡張と主観性に関する認知言語学的分析 ——用法基盤モデルの観点から——		
調査委員	〔主査〕山梨 正明 〔副査〕齋藤 治之, 大木 充		

---

### 論文要旨

認知言語学の枠組みにおける意味の研究は、認知主体の日常経験や意味づけのプロセスを明らかにしながら、言語と人間の知のメカニズムとの関係を探る研究として位置付けられる。

本論文は、この認知言語学の枠組みに立ち、日常言語に観察される様々な意味拡張と、拡張された意味を支える認知主体の主観性の役割について分析したものである。特に用法基盤モデルの観点から、実際の拡張事例の使用文脈と言語が表す事態の生起状況との関係について詳細な検討を行い、事態に対する判断やそれに伴う感情といった認知主体の事態把握における主観性が、それぞれの言語表現の意味に与えている役割を明らかにした。

本論文では、主に日本語の動詞や副詞における多義性を分析の対象とした。まず、これらの多義性を意味拡張の視点から捉えなおし、多義における各々の意味を認知主体の事態把握に基づき、分類と記述を行った。次に、分類された意味が認知主体の主観性の強さに従って、段階的に拡張していることを示した。また、用法基盤モデルの観点から、比喩的な意味への拡張が、言語表現の使用頻度と認知主体の事態把握の違いによって生じることを明らかにした。これらの分析により、日常言語の意味拡張という現象において、従来は部分的な関係でしか捉えられていなかった意味同士が、認知主体の事態把握と主観性によって結びつけられ、有機的な意味ネットワークを形成していることが明らかとなった。

本論文では、さらに、これまでに提案されてきた用法基盤モデルが抱えている問題点を、言語の意味の学習面と、理解と産出の不可逆性から批判的に検討した。従来のモデルでは十分に説明できない問題に対して、膨大な経験知識の存在を仮定する拡張案を提示した。認知言語学における重要なモデルである用法基盤モデルを拡張することにより、今後の研究に対して新たな分析の視点を提供することが可能となった。

---

学位記番号	人博第 510 号	氏名	大野直樹
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 中西輝政		
論文題目	トルーマン政権下の CIA —— 対ソ戦略の策定過程における CIA の役割 ——		
調査委員	〔主査〕中西輝政 〔副査〕西村 稔, ハヤシ, ブライアン マサル		

---

### 論文要旨

CIA が行っていたソ連の脅威評価は、トルーマン政権の対ソ戦略の策定にどのような影響を与えたのか。CIA による予測失敗の事例研究には事欠かないが、従来の研究では CIA の脅威評価がどのように政策決定に利用されていたのかはほとんど論じられてこなかった。本稿はこの研究上のギャップを埋めることを目的とする。

自身が作成した情報評価書を政策決定に利用してもらおうとする CIA にとって、トルーマン政権期は苦闘の連続であった。対ソ戦略を規定する NSC 文書の起草過程では、国務省政策企画室が主導的な役割を担っていたが、それを率いたのはジョージ・ケナンである。この著名なソ連問題専門家は、設立されて間もない CIA の助力などは必要としておらず、CIA が出る幕はなかった。

CIA にとって転機となったのは、NSC 68 の策定だった。NSC 68 を起草した中心人物は、ケナンの後を継いで政策企画室長となったポール・ニッツである。前任者とは異なり、ソ連の軍事的脅威を重視するニッツは、1954 年までにソ連が 200 発の原爆を保有するとした CIA の予測を採用し、その時までには西側の軍備強化を達成すべきとした。さらに NSC 68 の具体的な実行計画の策定過程で、CIA は東西両陣営間の軍事力の格差が極大化する時期を 1952 年と予測したが、ニッツはこれも採用し、NSC 68 計画の目標達成期限が 1952 年へと前倒しされたのである。

しかし NSC 68 とそれを引き継いだ NSC 文書は、軍事的要素の評価に偏重したものであった。この点を指摘したもう一人の国務省のソ連専門家チャールズ・ボーレンの主張を受け入れて、CIA は軍事偏重からの脱却を図り、NSC における対ソ戦略の再検討に先駆けて新たに情報評価書を提出する準備を整えていた。しかしボーレンは CIA に頼ることなくソ連指導部の行動様式を独力で解釈したため、CIA に出番は回ってこなかった。再び CIA は国務省ソ連専門家の陰に隠れてしまったのである。

結局、トルーマン政権の対ソ戦略の策定にとって CIA の脅威評価が意味をもったのは、軍事的脅威の評価に特化した一時期だけであった。NSC 68 路線を推進するために CIA の予測の一部が利用されたに過ぎなかったのである。



---

学位記番号	人博第 511 号	氏名	趙 向 華
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 西井正弘		
論文題目	英国における難民認定手続及び基準の厳格化とその課題		
調査委員	〔主査〕西井正弘 〔副査〕西村 稔, 酒井啓亘 (法学研究科教授)		

---

### 論文要旨

本論文は、英国の難民認定に関する実行を検討し、同国における難民認定手続及び基準の変遷が示す特徴と限界とを明らかにしていくものである。

第 1 章は、「安全な第三国」概念の適用による難民認定手続の厳格化とその問題点について検討する。難民認定手続の負担を軽減するために、英国は「安全な第三国」概念を国内法に取り入れ、適用してきた。その結果、英国の難民認定手続は厳格化した。一部の庇護申請に対する実質的審査の拒否及び国内異議申立権の撤廃はその特徴である。しかし、前者は必ずしも難民認定手続の負担軽減という結果をもたらしたとは考えられない。また、後者と欧州人権条約第 13 条との整合性の問題が存在している。

第 2 章は、「国家保護の欠如」を構成要素とする「迫害」概念の解釈とその限界を検討する。今日の英国の判例法では、「国家保護の欠如」を構成要素とする「迫害」概念の解釈が確定されている。こうした解釈の下では、庇護申請者には不当に重い立証責任が課されている。「国家保護の欠如」を証明するために、庇護申請者は本国の保護能力及び保護に関する合理的意図の欠如を証明しなければならないからである。

第 3 章は、国内再配置選択の導入による難民認定基準の厳格化とその課題について検討する。英国の裁判所は判例の積み重ねを通じ、難民認定基準における国内再配置選択の適用を認めてきた。国内再配置選択の適用については「合理性」基準が採用されている。内務大臣には「合理性」の解釈に関する裁量の余地が与えられているので、厳格な解釈を行うことによって難民資格の付与が相当数拒否されることが懸念される。

第 4 章は、難民条約第 1 条 F(c) をテロリストとみられる庇護申請者に対して適用することから生じた問題について検討する。英国では、難民条約第 1 条 F(c) の適用対象とされた庇護申請者は追放の危険にさらされている。一方、欧州人権条約第 3 条は彼らに対して追放からの保護を提供している。欧州人権裁判所の判例では、第 3 条の適用についていかなる理由に基づく逸脱も許されないとされている。

本論文での検討を通じ、次の点が明らかとなった。難民問題を取り巻く国際的・国内的環境の変化に伴って、英国では難民認定手続及び基準の変遷が見られ、それらは厳格化の傾向を辿っている。この厳格化の傾向からは、難民問題を取り扱う際に難民の保護よりも国家利益を重んじるという英国の姿勢がうかがえる。難民認定手続及び基準の厳格化は、難民条約の英国における実施に新たな問題を提起している。こうした厳格化の傾向の下で、英国には、欧州人権条約の要請と合致する形で難民認定実行を再調整することが求められている。

---

学位記番号	人博第 512 号	氏名	白幡 俊輔
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 ヨリッセン, エンゲルベルト		
論文題目	軍事技術者のイタリア・ルネサンス —— 火器と築城術の変遷：フランチェスコ・ディ・ジョルジョ・マルティーニからピエトロ・カターネオまで ——		
調査委員	〔主査〕ヨリッセン, エンゲルベルト 〔副査〕岡田温司, 川島昭夫		

---

### 論文要旨

本論文はルネサンス期イタリアにおける戦争と社会の関係を考察しようとしたものである。具体的には、15世紀から16世紀にかけてイタリアで活躍した建築家が残した建築書と、彼らの活動から、ルネサンス期のイタリアにおける軍事技術の発達・変化と、建築家たちの軍事戦略思想の変遷の解明を試みている。第1章では、15世紀末までのイタリアにおける軍隊の編成・武器・戦術を概観したのち、イタリアの「傭兵隊長 condottieri」たちが、新しい軍事技術をもった建築家・技師を活用して、自己組織や戦術を変革しつつあったことを解明した。第2章では、イタリアで最初に「大砲」の発達に応じて新しい築城術（稜堡式築城）を考案した建築家であるフランチェスコ・ディ・ジョルジョ（1439-1501）の具体的な活動を、その活動した地域ごとに分析した。さらに彼が築城術によって実現しようとした都市防衛戦略を解明した。第3章ではフランチェスコ・ディ・ジョルジョの築城術が、古代ローマの建築理論家ウィトルウィウスの建築論を、当時最新の軍事技術に適合するように再解釈して作られたことを明らかにしたうえで、彼が次世代の建築家・軍事技師に影響を与えたのみならず、大砲に対抗しうる築城術を組み立てるうえで、完全に解決できない課題を残した点を指摘した。第4章では、フランチェスコ・ディ・ジョルジョに続く16世紀の建築家、おもにバルダッサーレ・ペルッツィとピエトロ・カターネオが、大砲に対抗するための稜堡式築城を完成させていく経緯を、彼らの実践した城砦建設および建築書から追った。第5章では、上記16世紀の二人の建築家が、城砦建設を通して「都市」を防衛することを意図したのみならず、より高度な戦略目標として「領土」「国家」の防衛を意図していた点を指摘し、その戦略思想と、当時の政治思想家の想定していた国家防衛戦略や軍事技術に対する認識との関係を比較・検討した。そして、こうした比較から、当時のイタリアにおける国防戦略思想の変化を浮かび上がらせた。

---

学位記番号	人博第 513 号	氏名	ルブナ オマル Lubna Omar
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 松井 章		
論文題目	<b>Bronze Age Animal Economy in al-Jazira Area of North-eastern Syria</b> (北東シリア al-Jazira 地域における青銅器時代の動物経済)		
調査委員	〔主査〕松井 章 〔副査〕小野健吉, 高妻洋成, 本郷一美 (総合研究大学院大学准教授)		
専門委員	ハンス=ピーター アープマン (チュービンゲン大学教授)		

---

### 論文要旨

本論文では、北東シリアの遺跡における動物遺存体分析から、青銅器時代（紀元前 3000-1300 年）の社会と政治組織の発達に関連した生業活動の変化を考察する。動物資源の消費と分配といった方策は、骨の分散を詳細に分析することで復原できる。そうした分析を時間的・空間的に行うことで青銅器時代の各時期における地域間の交流のあり方を明らかにできると考えた。

Tell Bderi 遺跡と Tell Ghanem al-Ali 遺跡から出土した動物遺存体を分析し、動物資源の経済的な構造を考察した。なお、時間的な分析には動物種の出現頻度と動物群の管理技術を含む。また、本研究では遺跡における骨の分散パターンを示すこと、出土動物が家畜か否かを査定し、家畜の利用比率を示すことの 2 つに注目した。

両遺跡の分析結果から、乾燥したステップ地帯に居住地をもつ EBA 期の経済システムが復原できた。それは、青銅器時代の各時期を通して家畜に依存し、ヒツジとヤギからタンパク質の大部分と多様な生産物（乳製品、毛、皮革など）を得るという Jazira 地域に長年守られてきた慣例に従うことを示す。ただし、他の家畜種は地域あるいは社会的な影響によって、出現頻度が変化する。

また、農村における動物遺存体の様相は、動物製品の消費における大都市からの統治のあり方を示唆する。地域間における動物製品の余剰の流通は、青銅器時代中期から統制され始めたと考えられる。

最後に Khabur 地域と Euphrates valley 地域の文化における動物遺存体を時期ごとに比較し、環境が社会経済に与える影響を考察した。これまで Jazira 地域の発達に影響を与えたと考えられてきた青銅器時代中期の気候の悪化は、生業活動の変化を導かなかった。つまり、上部メソポタミア地域における動物経済の変化は、都市の社会的な決定によって促進されたと考えられるのである。

---

学位記番号	人博第 514 号	氏名	宮崎 三世
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	共生文明学専攻 須田 千里		
論文題目	太宰治「道化の華」論 —— 書く行為を主題化した小説について		
調査委員	〔主査〕須田千里 〔副査〕内田賢徳、島崎 健、水野眞理		

---

### 論文要旨

「道化の華」(『日本浪漫派』, 昭和十年五月) は, 心中事件を起こして一人生き残った大庭葉蔵の物語と, その物語を苦心しながら書き進めていく書き手の「僕」の試行錯誤の物語とが同時進行で語られていくという, 幾分かみいった形式の小説である。本研究では, 「道化の華」の特異な文体を分析することによって, この小説の解釈について新たな主張を行う。

本作品には, 書き手の介入の程度という点からみて, 全く異なる二つの書き方が認められる。一つは, いわば十九世紀のリアリズムの作りだした, その書き手を感じさせない書き方であり, 葉蔵の物語の大半を構成している。もう一つは, 書き手「僕」が自己主張し, 葉蔵の物語にわり込むというものである。これらをそれぞれモード I, モード II と名づけ, 分析を行った。その結果, 本作品は, 何を書いても思いが満たされず, しきりに物語を否定する書き手の「僕」が, 先の展開が見えないまま葉蔵とともに結末まで歩み続けるという, 書きつつある書き手の一回的な創作現場が描かれた小説であるといえる。

本作品には更に, 二つのモードが重なるという書き方の様態が認められる。このことについて, 書き手と登場人物の区別がついていないと, 否定的な評価を与える見方もある。しかし, 本作品では, 一緒に死ぬという女との約束を破って一人生き残った葉蔵が実は「僕」にほかならないのだと, 殊更にほめかされているということが重要である。結末において, 書き手の「僕」は葉蔵と重なり合いながら, 園の眠る海にたどり着く。この結末が暗示しているのは, 葉蔵がいくら深刻な出来事を道化のように茶化しはぐらかそうとも, 園を決して忘れられないということである。と同時に, 言語化できない園への贖罪意識が, 「僕」をしてこのような結末にいたるまで小説を書き続けさせたということである。本作品には, 心中事件という深刻な出来事を扱っていないながらその内実が描かれていないという指摘がある。しかし, むしろ直接的には言及されない園への思いを炙り出すように書かれているのである。

学位記番号	人博第 515 号	氏名	アシス シュリバスタバ Asheesh Shrivastava
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 堀 智孝		
論文題目	Environmental Chemistry of Lake Biwa, Japan : general trend in the changes of water quality judged from the long-term variation and the characteristic distribution of nutritious elements (琵琶湖の環境化学 —— 栄養塩元素の長期変動と分 布形態から見た水質変化の一般的傾向について)		
調査委員	〔主査〕堀 智孝 〔副査〕杉山雅人, 石川尚人		

### 論文要旨

琵琶湖水中化学成分の観測が、1963年5月（時間 $t=0$ とする）を起点として、今日まで続いている。本学位申請者は、最近の3年間この観測に参加するとともに、全540月に及ぶ観測値に対して環境化学的考察を行った。申請者はまず、この540月の期間に琵琶湖にとって重要な二つの段階が含まれていることに着目した。第1期は1963年から1982年まで（ $t=0\sim 226$ 月）であって、人間活動の影響が小さかったこの時期の湖が天然自然の状態を脱し始めて富栄養化に向かい、その後半には、琵琶湖の環境保全を目指した条例が制定されるに至った。そして、1992年から2008年までの第2期（ $t=347\sim 540$ 月）では、湖の自浄作用が顕在化し始め、水質の回復基調がみえて来たと判定した。

本論文の第1章では、第1と第2期とその両者を併せた全期間のそれぞれにおけるリン、窒素、ケイ素濃度変化の一般的傾向を論じた。とりわけリンと窒素には時間軸に対する回帰分析を行い、全リン（TP）と全窒素（TN）の月平均増加率をそれぞれ0.00025,  $-0.0049$  ( $\mu\text{M}/\text{month}$ )と算出した。この傾向、つまりリンの増大と窒素の減少を琵琶湖北湖と南湖の双方で観測した。

第2章では、北湖と南湖における全窒素と全リンの比（TN/TP）を考察した。この比の平均値と標準偏差は、前者で $87\pm 37$ 、後者で $53\pm 31$ であった。TN/TP比はまれに異常に小さいあるいは大きい値が観測されることがあったが、異常に小さい値はDOPの高値とDONの低値が原因であることを確認した。特に近年の南湖では、粒子態窒素（PN）がほぼ一定であったのに対して、粒子態リン（PP）が低値になって、TN/TP比の異常な高値が現れることを指摘した。

第3章と第4章では、湖水の自然浄化が進行する水域の探査を目的にした。湖岸をA～Cの3グループに分類し、この分類に基づいて各グループにおけるTP/TNとDIP/DIN比、植物プランクトンおよび水性植物の繁茂の関係を考察した。TN/TP比の低値が観測された湖岸では、窒素固定シアノバクテリアの大量の繁殖がそれに同期していた。加えて、グループCでは水生植物が繁茂する時期にあわせて植物プランクトン（クロロフィルa）の減少がみられた。

---

学位記番号	人博第 516 号	氏名	池田 啓
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 瀬戸口浩彰		
論文題目	Vicariance history and adaptive evolution in the Japanese alpine plants elucidated by phylogeographic studies (系統地理解析によって解明された日本産高山植物の分布分断の歴史と適応進化)		
調査委員	〔主査〕瀬戸口浩彰 〔副査〕松井正文, 加藤 真, 市岡孝朗		

---

### 論文要旨

現存する生物種の種内には遺伝的な多型がある。そして、その多型は地理的な構造を持つことが系統地理学によって明らかにされてきた。とりわけ、分断された地域集団が遺伝的に分化していることが明らかにされてきた。生物の進化・多様性形成には、地理的な隔離とそれに伴う地域環境への適応が大きな影響を与えているので、種内における地域間での遺伝的分化は、異所的種分化の前段階であるものと考えられる。そのため、遺伝的に分化した地域集団の間で、それぞれの環境への適応に関与しているメカニズムを明らかにすることは、生物の異所的種分化におけるメカニズムを解明することにつながる。そこで、本研究では系統地理学的な観点から、日本産高山植物の地域間での遺伝的分化を詳述し、分化した地域集団の間にみられる環境適応に関わっている遺伝的多型を明らかにすることを旨とした。まず、7種の高山植物(コメバツガザクラ, ミネズオウ, ツガザクラ, アオノツガザクラ [ツツジ科], イワウメ [イワウメ科], ミヤマタネツケバナ [アブラナ科], ミヤマキンバイ [バラ科])を用いて、遺伝的多型とその地理的な構造を明らかにした。その結果、5種(ミネズオウ, アオノツガザクラ, イワウメ, ミヤマタネツケバナ, ミヤマキンバイ)においては、中部地方の集団と東北地方・北海道(北日本)の集団が、遺伝的に大きく分化していることが明らかになった。このことは、多くの日本産高山植物において、中部地方と北日本の集団は長期間にわたり分断されたことを示唆している。この分布における分断の歴史を統計的に評価するために、ミヤマタネツケバナをモデル系として、集団遺伝学のモデル(IMモデル)による検証を試みた。その結果、両地域は約11万年前(最終間氷期)に分断され、その後は完全に隔離されたことが明らかになった。さらに、この分断に伴い、両地域の環境に対して、どのような遺伝子が適応に関与しているかを明らかにした。生態的に重要な役割を持つ14個の遺伝子を用いて、その多型が中立に進化したかを評価した。その結果、赤色光受容体であるフィトクロムをコードする遺伝子の1つである *PHYE* が非中立に進化していることが明らかとなった。この *PHYE* 遺伝子の分子系統樹を構築したところ、中部地方と北日本の個体の間では、遺伝子型が大きく分化していた。そして、この2系統の間には中立から期待されるよりも多くのアミノ酸置換が蓄積していた。これらのことは、中部地方と北日本のそれぞれの地域環境への適応に、ミヤマタネツケバナでは *PHYE* が関与していることを示唆している。フィトクロムは、様々な生理・発生機構の中核として、それらを制御する役割を、植物の生活史を通して果たすタンパク質である。このような中核となる物質をコードする遺伝子の多型が自然選択により地域集団の間で分化していることは、各地域への環境適応に伴って様々な生理・発生機構が分化する可能性があることを意味している。この発見は、生理代謝や発生において中核となる少数の遺伝子が、地域環境への適応に関わり分化することで、生物の異所的種分化において大きな役割を果たしていることを示唆している。

---

学位記番号	人博第 517 号	氏名	まつ だ けん た 松 田 健 太
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 三浦 智行		
論文題目	<i>In vivo</i> analysis of a new R5 tropic SHIV generated from the highly pathogenic SHIV-KS661 (強毒 SHIV-KS661 を基に作製した新規 R5 指向性 SHIV の <i>in vivo</i> 解析)		
調査委員	〔主査〕三浦 智行 〔副査〕小松 賢志, 五十嵐 樹彦		

---

### 論文要旨

これまで動物モデルによる抗 HIV ワクチン評価に使用されてきた CXCR4(X4) 指向性 SHIV は、共受容体指向性の観点から大多数の HIV-1 とは異なる為、ワクチン評価モデルとしては不相当であると考えられる。そこで本研究では HIV-1 の感染伝播と感染後の病原性に深く関与していると考えられる CCR5(R5) に指向性を有する SHIV の作製を目的とした。方法として、X4 指向性 SHIV-KS661 の V3 領域に 5 箇所のアミノ酸変異を導入し、共受容体指向性を R5 型にしたウイルスを作製した。作製した変異体ウイルスをアカゲザルに静脈内接種し、経時的に採血と小腸生検を行った。ウイルス複製能の検証を行うため、血漿中のウイルス RNA 量をリアルタイム PCR で定量した。また、フローサイトメトリーを用いて血中と小腸におけるリンパ球サブセットの解析をおこなった。その結果、最初に接種した 2 頭においてウイルス複製が確認された。2 頭中 1 頭のサルで感染 8 週までに血中のウイルス RNA 量が検出限界以下まで減少したが、1 頭のサルでは 12 週以降も  $10^3 \sim 10^4$  copies/ml 程度のウイルス RNA 量を維持した。また、CD4 陽性 T 細胞の減少は R5 指向性ウイルスの標的細胞であるメモリー T 細胞の割合が大きい小腸において顕著にみられたが、メモリー T 細胞の割合が小さい抹消血において顕著な減少は見られなかった。また、時間の経過と共に CD4 陽性 T 細胞数の回復が見られた。そこで一定の血中ウイルス RNA 量を維持していたサルから末梢血単核球およびリンパ節からリンパ球を分離し、非感染サルに静脈内接種することで *in vivo* 継代によるウイルスの馴化を行った。三代目のサルにおいて高い血中ウイルス RNA 量のピークとセットポイント、小腸での激しい CD4 陽性 T 細胞の減少が確認されたことから、ウイルス分離を行い、SHIV-MK38 と名づけた。この SHIV-MK38 は R5 指向性を維持しており、新たに 3 頭のサルに静脈内接種したところ、全てのサルにおいて持続的なウイルス血症を示した。以上から、サルで安定して感染・複製できる R5 指向性 SHIV-MK38 株を樹立できた。今後、ワクチン評価に有用なモデルとなりうることを期待される。

---

學位記番号	人博第 518 号	氏名	奥村豊旗
學位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 内本喜晴		
論文題目	Fundamental Studies of Lithium Ion Transfer for the Development of Next Generation Rechargeable Lithium Battery (次世代リチウム二次電池開発のためのリチウム移動過程の基礎研究)		
調査委員	〔主査〕内本喜晴 〔副査〕堀 智孝, 杉山雅人, 安部武志 (工学研究科教授)		

---

### 論文要旨

リチウムイオン二次電池は高エネルギー密度という特徴のために、携帯電子機器の電源として普及している。その充放電過程は、トポケミカル反応によりリチウムイオンが正極、負極において挿入脱離することで進行する。今後の低炭素社会実現のためのキーデバイスとして、次世代自動車用電源やスマートグリッド用の蓄電デバイスとしての応用をはかるためには、さらなる高エネルギー密度化と高出力化が重要な課題である。高出力化のためには、電極バルクや電解質バルクの抵抗を減少させること、電極/電解質ヘテロ界面での電極反応速度を向上させることが必要であり、両過程においても重要なのは、バルクおよび界面におけるリチウムイオン導電率の向上である。本研究では、電極と固体電解質のバルク・界面それぞれのリチウムイオン導電率と電子・結晶構造の相関関係を明らかにし、リチウムイオン二次電池のバルク材料設計および界面設計の指針を目指した。

#### 第 1 部 電極バルクおよび固体電解質バルクにおけるリチウムイオン移動

ペロブスカイト型およびガーネット型結晶構造を有する固体電解質において、Li イオン濃度、イオンの規則配列、異種イオン置換がリチウムイオン導電率に与える影響について検討を行った。さらに、スピネル型結晶構造を有する正極材料および負極ナノ材料をモデル材料として、異種イオン置換ナノサイズ化が、リチウムイオン拡散挙動に与える影響について検討した。上記、固体電解質、正極・負極のリチウムイオン移動経路の局所構造がリチウムイオン移動を支配していることを明らかにした。

#### 第 2 部 電極/電解質界面におけるリチウムイオン移動

リチウムイオン二次電池の電極/電解質界面においては、リチウムイオンの両相間の相間イオン移動が進行する。スピネル型結晶構造を有する正極材料において、アニオン置換およびナノ粒子被覆による界面修飾を行い、相間イオン移動に及ぼす影響を検討した。また、負極ナノ材料をモデル材料として、ナノサイズ化による界面局所構造変化が、相間イオン移動に与える影響について考察した。さらに、電極/固体電解質界面の構造を、その場観察できる深さ分解 X 線吸収分光法を開発し、電極/固体電解質界面ではバルクとは異なる電子・局所構造を有すること、それが相間イオン移動を支配していることを明らかにした。

以上、バルクおよび界面での電子・局所構造とリチウムイオン移動の関係を明らかにすることで、リチウムイオン二次電池の材料設計指針を与えることに成功した。



---

学位記番号	人博第 519 号	氏名	折 笠 有 基
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 内本 喜 晴		
論文題目	Material Design for Mixed Conducting Perovskite Type Oxide Cathodes of High Temperature Electrochemical Devices (高温電気化学デバイスにおけるペロブスカイト型混合導電体酸化物正極の材料設計)		
調査委員	〔主査〕内本 喜 晴 〔副査〕堀 智 孝, 杉山 雅 人, 安 部 武 志 (工学研究科教授)		

---

### 論文要旨

高温電気化学デバイスは、高温環境における高い反応速度という特徴を有し、固体酸化物形燃料電池 (SOFC)、高温水電解槽、酸素透過セル、センサなどへの展開がはかられている。その中でも SOFC は、化石燃料を用いず、温室効果ガス抑制に役立つクリーンな発電システムとして実証試験段階にあり、本格普及が期待されている。SOFC における反応場は、電極/電解質/気相の三相からなる三相界面である。これまで、この三相界面における反応機構は不明な点が多く、そのことが反応機構に基づく各種材料設計指針の確立が出来ない主たる要因となっている。本研究では、SOFC の性能を律しているカソードにおける酸素還元反応に焦点を当て、カソード材料として種々の希土類 3d 遷移金属ペロブスカイト型類縁酸化物を取り上げ、酸素還元反応に影響を及ぼす同酸化物の電子構造、局所構造を明らかにすると同時に、新たに開発したシンクロトロン放射光を用いたその場測定法を用いて、反応機構の解明を行った。

第 2 章では、ペロブスカイト型類縁酸化物の電子構造に着目し、電子伝導機構と電子構造との関係を X 線吸収端構造から考察した。本研究で用いた希土類 3d 遷移金属ペロブスカイト型類縁酸化物材料では遷移金属 3d 軌道と酸素 2p 軌道が強く混成していることが示された。これまで未解明であった同酸化物の酸素空孔や格子間酸素を導入した場合の電子構造変化を、酸素分圧を精密に制御して酸素空孔量や格子間酸素量を制御することにより明らかとした。

第 3 章では、ペロブスカイト型類縁酸化物の局所構造に着目し、広域 X 線吸収微細構造の結果から得られた局所構造変化および導電率緩和法により測定された化学拡散係数に基づき酸化物イオン伝導機構について検討した。その結果、局所歪みと酸化物イオン伝導とが強い相関を有していることを明らかとし、高酸化物イオン導電性酸化物の構造設計指針を示した。

第 4 章では、X 線吸収分光法を高温、各雰囲気下、電圧印加時に測定できるよう、装置の設計および測定、解析を行った。電圧印加時において電極の酸素ポテンシャル変化を直接測定し、空気極/気相表面において酸素ポテンシャルが大きく変化しており、表面反応が律速過程であることをはじめて明らかにした。これは、低温における電気化学系とは大きく異なる点であり、高温電気化学系電極材料設計にとって極めて重要な知見である。

学位記番号	人博第 520 号	氏名	久田 旭彦
学位授与の日付	平成 22 年 3 月 23 日		
専攻・指導教官名	相関環境学専攻 藤原直樹		
論文題目	擬一次元梯子格子物質 $\beta\text{-Ag}_{0.33}\text{V}_2\text{O}_5$ の局所電子構造と磁気秩序構造に関する研究		
調査委員	〔主査〕藤原直樹 〔副査〕前川 覚, 宮本嘉久		

### 論文要旨

圧力は物質に乱れを加えることなく原子間距離を変化させることのできるクリーンな物理パラメータである。圧力印加によって相互作用や次元性を制御し、量子相転移や構造相転移を引き出そうとする試みが盛んに行われており、低温高圧技術の発達に伴い、高圧下での興味深い物性が多数報告されている。

バナジウム酸化物初の超伝導体である擬一次元梯子格子物質  $\beta\text{-A}_{0.33}\text{V}_2\text{O}_5$  ( $\text{A}=\text{Li}, \text{Na}, \text{Ag}$ ) は常圧において電荷秩序転移と反強磁性転移を示す物質であり、電荷秩序を圧力によって抑制することで超伝導が出現する。この超伝導相は電荷秩序相と隣接することから、電荷揺らぎを媒介とする新奇な超伝導発現機構の可能性が期待されており、その解明を目指すうえで電荷秩序相の電子構造を知ることが重要である。

そこで本研究では擬一次元梯子格子物質  $\beta\text{-Ag}_{0.33}\text{V}_2\text{O}_5$  について核磁気共鳴 (NMR) 測定を行い、常圧における局所電子構造と磁気秩序構造を解析した。まず各相における  $^51\text{V}$  NMR スペクトルを測定し、NMR ピークの磁場に対する角度依存性をもとに信号をサイト同定し、3つの V サイトの電場勾配の主軸方向を決定した。この結果、各 V サイトの  $3d$  電子軌道状態が、拡張 Hückel tight-binding 計算に基づき提案されている二本脚梯子モデルに一致することを証明した。さらに各相における核四重極共鳴周波数の値を求め、絶縁体相における磁性サイトの電荷密度を見積もるとともに、電場勾配テンソルの温度依存性から、V1-V3 梯子と V2-V2 梯子が独立した性質を示すことを明らかにした。また、反強磁性相については、ゼロ磁場共鳴スペクトルをもとに磁気秩序構造の解析を行い、電荷秩序化によって梯子格子の横木内で共有された  $3d$  電子が、共有されたまま磁気秩序化することを解明した。これはバナジウム酸化物において共有された電子の磁気秩序化が観測された初めてのケースである。

また、多層式ピストンシリンダー型セルを用いた 2 万気圧級  $^51\text{V}$  NMR 測定に加えて、高圧下物性研究に向けた 7 万気圧級の改良型ブリッジマンアンビルセルの小型化開発を行った。本研究で開発した装置は、NMR 測定に加え、電気抵抗や交流帯磁率の測定も多重条件下で行なうことを可能にするものである。

本研究の成果が、 $\beta\text{-A}_{0.33}\text{V}_2\text{O}_5$  系における超伝導発現機構の解明に加え、高圧下物性研究の発展に寄与するものとなることを期待する。

---

学位記番号	論人博第 30 号	氏名	福 <sup>ふく</sup> 田 <sup>だ</sup> 美 <sup>み</sup> 穂 <sup>ほ</sup>
学位授与の日付	平成 21 年 5 月 25 日		
専攻・指導教官名	人文科学研究所 田中 淡		
論文題目	元代建築の史的研究 —— 宮殿配置を中心に ——		
調査委員	〔主査〕田中 淡 〔副査〕江田憲治, 伊從 勉, 西垣安比古		

---

### 論文要旨

本論文は、モンゴルが支配した元の時代の建築について解明を試みたものである。とくに宮殿建築については、十分な研究が行われてきたとは言い難い。元の都であった大都では、皇室専用区域であった皇城が、中央ではなく南に偏っている。この偏在が注目され都市計画の問題として議論されてきた。しかし、いまだ定説はない。

ところが、こうした都市計画の議論では、皇城のなかみについては、ほぼ顧みられてこなかったとあってよい。しかし、都城を造営するということは、都市計画を策定しなければならないのと同時に、宮殿一棟一棟も設計しなければならなかったはずである。したがって、都市計画と宮殿とは無縁ではありえないであろう。

そこで、個別の宮殿をひとつずつ考証することで浮かび上がるであろう、宮殿の全体計画を考えることによって、これまでいわば外枠だけを問題にする傾向の強かった都市計画の議論に新しい研究の展開を試みたのが本論文である。

結論を述べれば、宮殿を配置する場合、そこには「西を尊び北を空けておく」空間観念もしくは習慣が認められる、ということである。これは、じつはテントを建てる場合の配置法である。また、皇城内でもテントを使い続けていたことを示す史料も複数ある。したがって、モンゴルの宮殿には少なくとも、漢文化の要素とモンゴル固有の文化 —— ここでは仮にこう呼んでおく —— の要素があったことになる。

この配置法は、元朝末期のモンゴル皇帝が建てた宮殿の配置にも現れている。しかもこの宮殿は、皇帝が中国趣味を実践した場所である。中国趣味の建築にすらテント配置法に従っていることは、元朝の宮殿を象徴するものだったと言えよう。また、皇城の庭園を検討してみると、ここにも漢の要素とモンゴルの要素の混在が認められる。

一方、皇室が造営した寺院について、従来はチベット式であるとの意見もあった。しかし、建築史学の立場から史料を検討すると、そうではなく、むしろほぼ中国建築で建てられていたと思われる。しかも、寺院の中心部に池を配したり、寺院の四隅に角楼を設ける場合もあり、それまでなかった新しいデザインが認められる。

以上のように、元の建築には中国の要素と「モンゴル」の要素とが認められることを論証した。そして、今後、研究をさらに発展させるため、次の二つのテーマについて考察し、それぞれを附論一、二とした。ひとつは中国住宅史の研究の現状と展望についてである。もうひとつは、学際研究を進める手がかりとして一中国美術史家を取りあげ、その美術史と建築史とにわたる研究を概観し、今後の研究のヒントを探ってみた。

---

学位記番号	論人博第31号	氏名	見平典
学位授与の日付	平成21年11月24日		
専攻・指導教官名	文化・地域環境学専攻	西井正弘	
論文題目	司法積極主義の政治的構築——アメリカの憲法秩序形成における司法と政治——		
調査委員	〔主査〕西井 正弘 〔副査〕西村 稔, 土井 真一 (法学研究科教授)		

---

### 論文要旨

従来の日本の憲法学の司法審査制論は、アメリカ連邦最高裁判所の積極的な司法審査活動から大きな影響と刺激を受けてきたにもかかわらず、その実態を経験的に精確に把握することに十分に取り組んでこなかった。だが、現象を精確に理解することは、現状の評価や制度設計をめぐる議論、あるいは規範理論をより豊かなものにする上で不可欠であると考えられる。そこで、本稿は、連邦最高裁の積極主義の動態と源泉を経験的に解明し、連邦最高裁の作動に関する従来の硬直的な理解を再考するとともに、それを通して、現代アメリカの憲法秩序形成における司法と政治の機能を捉えることを課題とする。

そのために、まず第1章では、連邦最高裁の作動に関するアメリカ司法政治学の先行の諸研究を整理・検討し、本稿の経験的研究としての意義を明らかにする。

第2章では、近年の「政治レジームアプローチ」の事例研究を手掛かりとして、「司法積極主義の政治的構築」という視角を提示し、通常司法審査の抑制を図ると考えられている政治指導者が、特定の政策領域において、連邦最高裁の積極的な司法審査活動の構築に従事する可能性があることを指摘する。このような視角は、司法審査と政治部門をゼロ・サム的に把握する従来の一般的な認識枠組みでは捉えきれないものであり、本章ではこの視角を理論的に整理する。

第3章では、連邦最高裁の代表的な積極主義の事例をこの視角から再解釈する。

第4章では、「司法積極主義の政治的構築」が、ニューディール期以降のアメリカ政治発展内部の緊張から構造的に生じていることを示し、この視角の持つ一般性を明らかにする。

第5章では、現代の連邦最高裁の広範な積極主義が、「司法積極主義の政治的構築」を起点とした経路依存的ダイナミズムから発展してきたことを明らかにする。そして、4・5章の議論を踏まえ、連邦最高裁の広範な積極主義の源泉について、本稿の結論を提出する。

最後に、以上の議論から、①アメリカの憲法秩序形成の動態、②司法審査制論、③日本の最高裁の司法審査活動について得られる示唆をまとめる。

---

学位記番号	論人博第 32 号	氏名	勝 盛 典 子
学位授与の日付	平成 22 年 1 月 25 日		
専攻・指導教官名	文化・地域環境学専攻	松田 清	
論文題目	近世異国趣味美術の史的研究		
調査委員	〔主査〕松田 清 〔副査〕稲垣直樹, 岡田温司, 江田憲治, 西垣安比古, 篠原資明		

---

### 論文要旨

本論文は、池長孟<sup>いけながはじめ</sup>（1891～1955）が「日本で製作された異国趣味美術品」というテーマで蒐集したコレクションのうち、主に 18 世紀以降のオランダと関わりの深い美術工芸品を対象として、美術史における近世日欧文化交流の研究に寄与しようとするものである。

広汎な歴史的背景を理解し、専門分野を横断する作品群に対応するために、史資料の検証を研究の根幹に据え、新しい視点からのアプローチを試みた。具体的には、江戸時代後期の洋風画と工芸資料について、日蘭貿易や長崎地役人の研究、オランダ語史料・舶載蘭書の研究、科学史からのアプローチ、顔料の科学的分析など多角的な検証方法を用いることによって、各作品を歴史的に位置づけ考察した

本論文は 5 部および資料編からなる。

「第 1 部 洋風画研究序説」では、本論文で一貫した、洋風画研究における舶載蘭書調査と顔料の科学的分析という、二つの新しい方法の最初の事例を示す。

「第 2 部 蘭学と洋風画 —— 石川大浪をめぐる ——」では、旗本画家石川大浪・孟高兄弟の伝記、作品の典拠、制作目的と経緯を検証し、蘭学者山村才助との交遊を軸に、深い教養と好奇心に満ちた大浪の新しい像を提示した。また、歌川国芳が用いた蘭書を明らかにし、蘭学と絵画作品、蘭学者と画家の関係性を考察した。

「第 3 部 亜欧堂田善の蘭書受容」では、田善の蘭書利用の実態を検証し、これまで注目されていなかった加賀藩との関係を明らかにした。

「第 4 部 長崎の洋風画再考」では、長崎の洋風画家若杉五十八と荒木如元を対象に、伝記と作品研究の両面で新しい知見をまとめ、江戸時代後期の長崎における洋風画について検証した。

「第 5 部 近世工芸資料にみる異国趣味」では、若杉五十八と輸出漆器の関係を検証するために、長崎に焦点をあわせて近世後期の工芸資料について考察した。最後に、関係史資料の翻刻を「資料編」にまとめた。

補論では、池長コレクション形成の背後にある植物学者牧野富太郎とパトロン池長孟の関係史を新資料によって詳述した。